The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	認知・機能言語学研究 Ⅷ（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91592
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2022

認知・機能言語学研究 Ⅷ

王　　鈺
蘇　　暁　笛
田　尾　俊　輔
瀬　戸　義　隆
三　野　貴　志
小　薬　哲　哉

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2023

言語文化共同研究プロジェクト 2022

認知・機能言語学研究 Ⅷ

目次

王　鈺
現代日本語の分離動詞における 2 種類の一体性について. 1

蘇　暁笛
日本語の語彙的複合動詞「V1＋詰める」の意味形成とその認知的メカニズム 11

田尾　俊輔・梶原　久梨子
Locative Sense “Point” of the English Preposition *At*
－A Comparison with the French Preposition *À*－..... 21

瀬戸　義隆
BA Imperative Conditional in Modern Japanese
－With a Focus on Distributional Aspects –..... 31

三野　貴志
Number Disagreement in *There* Sentences with Existence Verbs..... 41

小薬　哲哉
現代日本語の「X-ぶり／-っぷり」に関する意味分析..... 51

現代日本語の分離動詞における 2 種類の一体性について

王　鈺

1. はじめに

本稿では、(1)と(2)のように、「あるもの X（分離元）からあるもの Y（分離物）を分離させる」という出来事を表す動詞を「分離動詞」と呼び、この動詞における X と Y の関係や意味特徴を明らかにすることを目的とする。

(1) a. ボトルから栓を抜くというよりも栓からボトルを外すという感じでボトルを左右にひねりながら下方に抜く。[1]　（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

b. 水となじむ乳化剤や可溶化剤が、クレンジングオイルには配合されているから、白く濁ってオイルとお化粧を肌から落とす。　（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

(2) a. 親指の爪をきちっと切って、ヤスリで角を落とした。（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

b. 次郎くんは外の木からもいできたリンゴと黄色いプラムのような実をナイフで切り刻み…　（BCCWJ, 益永みつ枝『Viva!Live!よくぞ女に生まれけり』）

(1)と(2)は、いずれも状態変化動詞で、位置変化を表す日本語の分離事象表現である。このような事象では、2 つの下位事象が含意される。1 つは、分離元 X から一部が分離されるというように、分離物 Y の位置が変化することである。もう 1 つは、Y の位置変化に伴い、X の状態にも変化が生じることである。例えば、(1a)では、移動物「栓」は位置変化していると同時に、背景となる「ボトル」は、栓がなくなるという状態に変化していると捉えられる。(2a)では、動作主は、分離物である「爪」を切り捨てたと同時に、分離元である「親指」も清潔になるという状態変化が見られる。

一方、(1)と(2)のような分離動詞では、文法的振舞いで以下のような違いが見られる。

(3) a. ??太郎は白髪を抜いて取る。

b. 太郎は白髪を切って取る。

(4) a. *太郎はリンゴを落として取る。

b. 太郎はリンゴをもいで取る。

「V て取る」という形と融合できるかどうかによって考えると、両者は、同様に分離事象を表すが、(a)の動詞は、手段関係になりにくいのに対し、(b)の動詞は、分離動作の手段・様態を表すことができる。先行研究は、(a)の動詞を離脱動詞（李 2016 など）、(b)の動詞を切

[1] 本稿では、特に断りのない限り、提示した例文中の下線はすべて筆者が施したものである。また、例文の出典を明記しない場合、筆者による作例である。

断・破壊系動詞（洪 2020 など）と呼び、ほとんどの研究は、両者を分けて考察していた。本稿は、先行研究と異なる立場を採用し、この 2 種類の動詞をともに分離動詞の下位タイプとして扱い、前者を「離脱型分離動詞」、後者を「分断・破壊型分離動詞」と呼ぶことにする。

論文の構成は以下のとおりである。2 節では、まず先行研究を概観することで、分離事象と分離動詞の特徴を確認する。3 節では、BCCWJ コーパスに基づき、意味論の観点から、動詞における分離元と分離物の関係を分析し、離脱型と分断・破壊型の分離動詞の違いを考察する。4 節では、一体性変化の側面から、2 種類の分離動詞における行為連鎖に説明を与える。最後に 5 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 日本語における分離事象と分離動詞の特徴

日本語の分離動詞と呼ばれる「切る」などの動詞は、(5a)のように、結果補語をとり、一続きのものを分断するという状態変化を表すと多くの先行研究で指摘されてきた。一方、(5b, c)では、「から」が移動の起点を表すことで、あるもの X（分離元）からあるもの Y（分離物）を分離させるという位置変化を表している。このような分離元の状態変化と分離物の位置変化という両面性を備えた分離事象については、これまであまり考察がなされず、これらの現象が分離動詞のどのような性質に起因するものなのか明確になっていない。

(5) a. 夏子が野菜を<u>細かく</u>切った。
b. 夏子が<u>柿の木から</u>実をもいだ。
c. 夏子が<u>ボトルから</u>栓を抜いた。

Goldberg（1991）は「単一経路制約（the Unique Path Constraint）」を提唱している。この制約によると、単文において異なる種類の経路を伴う変化を表してはならない。しかし、次の(6)のような反例が挙げられる。

(6) a. The cook cracked the eggs into the glass.
b. Daphne shelled the peas onto the plate. （Levin and Rappaport Hovav 1995: 60）

(6)では、「卵の殻を割る」、「豆のさやを取る」という状態変化事象を表す動詞 crack、shell と、移動の方向性を表す前置詞表現 into、onto が単文内で共存しているという言語事実が見られる。これと同様に、日本語の分離事象を表す構文「X から Y を V」は、X の状態変化を表す動詞に、Y の移動の起点を表す方向句「から」が伴っているため、単一経路制約に反する表現であると認められる。このような特徴により、分離事象表現は、「状態変化を内在する移動表現」として、移動事象の中で特殊な位置を占めると考える。

一般的に、移動事象表現の中には、移動（Motion）の事実に加え、図（Figure）、経路（Path）、地（Ground）、様態（Manner）、原因（Cause）という基本的な意味要素が含まれる。分離事象

が言語化される際に、最もよく現れるのは、地としての分離元と、図としての分離物という2つの要素である。

柴田（1976）は、分離物と分離元の特徴に注目し、「はがす」、「はぐ」、「むく」という3つの動詞を比較した。分離物の状態に関して、「はがす」の分離物は、「くっついて（くっつけて）ある」状態にあるが、「はぐ」と「むく」の分離物は、「本来の一部としての表面」であると指摘した。また、分離元の状態に関して、この3つの動詞の中で、「はがす」動作を受けたものは、必ずしも破れるわけではないのに対し、「はぐ」、「むく」動作を受けたものは、破れたり本体に傷ついたりすることがあると述べた。しかし、柴田は、個別の動詞の意味特徴を分析するところにとどまり、「はがす」と、「はぐ」、「むく」を異なる動詞グループとして捉えて考察していない。

本稿は、1節で述べた「Vて取る」の動作の手段関係になれるかどうかを基準とし、「はがす」、「抜く」、「落とす」を離脱型分離動詞、「剥く」、「切る」、「もぐ」を分断・破壊型分離動詞と捉える。次に分離元と分離物の関係から、2種類の動詞グループの違いを考察する。

3. 分離元と分離物の意味関係

3.1. 調査方法とデータ収集

本稿は、離脱型分離動詞に属する「抜く」、「落とす」、「はがす」、分断・破壊型分離動詞に属する「切る」、「もぐ」、「剥く」を考察対象とし、グループを分けてそれぞれの動詞における分離元と分離物の関係を考察する。

分析のための言語資料について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）』（以下、BCCWJ）およびオンライン検索システムNINJAL-LWP for BCCWJ（以下、NLB）を用いてデータを収集した。本稿は、物理的分離事象を中心に考察し、分離元Xと分離物Yを含む構文について、「XからYをV」と「XのYをV」という2つの形がよく見られるため、NLBからその構文に当てはまる「ヲ格名詞」Yを抽出した。ここで注意したいのは、コーパス調査の際に、実際にXは言語化しない場合があることである。本稿では、論理的にXを想定できる分離事象と判断できれば、この構文に当てはまるものとして扱っている。また、抽出したヲ格名詞の中で、(7)のように、位置変化のみを含意するタイプ(7a)と、状態変化のみを含意するタイプ(7b)を除く。[2]次頁の表1は、各動詞におけるヲ格名詞のタイプ数と分離物Yのタイプ数を示す。

(7) a. <u>爆弾を落とす</u>前から映画を撮っている。　（BCCWJ, 安野光雅著『空想書房』）
　　b. 刃物を使用して<u>紙を切る</u>。　（BCCWJ, 荒川達著『私にもできる裏打と裁断』）

[2] 本稿は、位置変化のみを含意するタイプを移動事象、状態変化のみを含意するタイプを完全破壊型事象と定めている。これらの事象は、位置変化と状態変化の両面性を備えた分離事象と異なり、そのヲ格名詞も分離物に該当しないと考える。

分離動詞タイプ	動詞	物理的分離物のタイプ数/ ヲ格名詞のタイプ数
離脱型分離動詞	抜く	61/611
	落とす	49/817
	はがす	56/124
分断・破壊型分離動詞	切る	46/1040
	もぐ	19/31
	剥く	25/63

表 1　分離動詞における分離物 Y のタイプ数

3.2. 観察

3.2.1. 空間関係

以下、2 種類の分離動詞における X と Y の意味関係を考察する前に、まず空間関係の種類を確認する。田中（1987）は、P（X, Y）において、X と Y の空間関係を表すのが前置詞であると指摘した。英語前置詞の中で最も基本的なものは、IN、ON、AT という 3 つである。この 3 つの前置詞のコアとプロトタイプが次のように記述されている。

IN：コアは「空間」、プロトタイプは「物理的境界のはっきりした 3 次元の空間」である。
ON：コアは「接触」、プロトタイプは、「Y が X の水平面に接触している」である。
AT：コアは「場所」、プロトタイプは、「点」である。

田中（1987: 333-349）

また、上記の 3 つの主要な空間関係以外に、OF という前置詞が表す「分離と帰属」の関係が見られる。田中（2011）では、OF のコアを「出どころと帰属を同時に表す」と定めている。「Y is a part of X」のように、X と Y には、地と図の相対関係があり、広義には一種の空間関係として捉えられる。本稿は、この 4 つの前置詞の表す空間関係を使用し、分離動詞における X と Y の関係に関して、ラベリングを行う。

3.2.2. 離脱型分離動詞の意味関係のパターン

まず、離脱型分離動詞における X と Y の意味関係を分析する。表 2 に、頻度の高い物理的分離物 Y の対象を示す。[3]

[3]本稿は物理的分離事象を主な考察対象とする。表 2、表 3 では、「電源を抜く」、「歯を剥く」などの抽象化したものを除外した。なお、例文分析では、抽象的な分離事象の用例を示し、その抽象化のプロセスを述べる。

抜く	関係	落とす	関係	はがす	関係
空気	IN	汚れ	ON/AT	シール	ON
栓	ON	葉	OF	剤	ON
歯	OF	灰	AT	塗装	ON
毛	OF	化粧	ON	紙	ON
針	AT	メイク	ON	シート	ON
アク	ON	垢	ON/AT	テープ	ON
水	IN	脂肪	ON/OF	皮	OF
プラグ	ON	脂	ON	シーツ	ON
ケーブル	ON	泥	ON	ラップ	ON
コード	ON	枝	OF	ラベル	ON

表 2　離脱型分離動詞における X と Y の意味関係

表 2 に示されるように、離脱型動詞における X と Y の関係では、4 つの前置詞関係のいずれも見られる。本稿は、その意味関係について、以下の 3 つのパターンに分けて記述した。

【パターン 1　付着・付属】: X についている Y を V（AT/ON 関係）

パターン 1 は、AT/ON 関係にあたるものである。3 つのパターンのなかで、最も多くの用例を含み、3 つの離脱型分離動詞はいずれもこの意味関係を有する。以下のような例文があげられる。

(8) a.　キッチンの油汚れや、浴室のバスタブの黒ずみなど、こびりついた汚れを落とす時に使えば…（BCCWJ, 佐光紀子著『重曹・酢・石けんナチュラルおそうじ』）

b.　塗装などにダメージなくきれいにシールを剥がす方法があれば教えてください。（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

c.　支障はないが、待機電力節約の為、コンセントからプラグを抜くことを推奨。白（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

(8a-c)はいずれも付着・付属の関係に当てはまるが、X と Y の接触の形が異なっている。例えば、(8a, b)は、Y がそれぞれ点か面で X の表面に付着していることを表す。(8c)では、Y が X に接しているだけではなく、X にきっちり固定されていることである。接触の形式によって、X と Y の密着度が異なるが、AT/ON 関係を 1 つの連続体として捉えることが可能である。つまり、X と Y の空間関係に基づき、パターン 1 における分離事象は、「X についている Y を V」で言い表すことができる。

【パターン 2　中身－容器】: X の内部にある Y を V（IN 関係）

パターン 2 は、IN 関係に当てはまるものである。3 つの離脱型動詞のうち、「抜く」と「落とす」はこの関係を有する。(9)のような例が挙げられる。

(9) a.　次に、中の空気をぬいて、容器内の様子を観察する。
（BCCWJ, 『新しい科学 2 分野下』）

b.　息を抜く/毒気を抜かれる。

c.　毎日の疲れを抜く/落とす/取る。

(9a)はパターン 2 での典型例である。ここでは、Y は X の表面に接している付着・付属物ではない。X は容器の性質を持ち、Y は X の中身であると考えられる。一方、(9b)、(9c)は、(9a)から抽象化したものである。この場合、X は人間の身体であり、Y は、X の中に満ちていたり含まれていたりする何らかの気持ち・状態である。これはパターン 2 から拡張した【パターン 2-1 状態－身体】に当てはまる。人間の身体を容器と想定すると、気持ち・状態は、容器の中身であると捉えられる。その中身を容器から外へ出すことで、人間の身体に状態変化が生じる。以上、パターン 2 における分離事象は、「X の内部にある Y を V」で表すことが可能である。

【パターン 3　部分－全体】: X の一部である Y を V（OF 関係）

パターン 3 は、OF 関係にあてはまるが、「抜く」、「落とす」、「はがす」のいずれの動詞においても、OF 関係にあたる Y の種類は少ない。

(10) a.　昔の歯医者は、虫歯が進行すると、歯を抜きました。
（BCCWJ, 佐光紀子著『重曹・酢・石けんナチュラルおそうじ』）

b.　それでも体脂肪を落とすには週百グラム。（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

c.　お腹周りに、ついた、頑固な脂肪を落とすためには...（BCCWJ, Yahoo!知恵袋）

(10a)と(10b)では、「歯」は身体部位であり、「脂肪」も体の構成部分であると考えられる。しかし、(10c)のように、「X についた脂肪」という表現もよく使用されるため、「脂肪」は完全に OF 関係として認識されているとは言えない。以上、【部分－全体】の関係に基づき、パターン 3 における分離事象を、「X の一部である Y を V」と記述する。

3.2.3. 分断・破壊型分離動詞の意味関係のパターン

次に、分断・破壊型分離動詞における X と Y の意味関係を考察する。表 3 に、頻度の高い物理的分離物 Y の対象を示す。

切る	関係	もぐ	関係	剥く	関係
水気	ON	柿	OF	皮	OF
水	ON	実	OF	殻	OF
封	OF	手足	OF	薄皮	OF
爪	OF	リンゴ	OF	柿	OF
枝	OF	翼	OF	卵	OF
切符	OF	プラム	OF	リンゴ	OF
指	OF	羽根	OF	竹の子	OF
茎	OF	足	OF	梨	OF
根	OF	手	OF	毛	OF
髪の毛	OF	爪	OF	爪	OF

表 3　分断・破壊型分離動詞における X と Y の意味関係

離脱型に現れる 3 つのパターンのうち、分断・破壊型では、【付着・付属】と【部分－全体】が見られる。なお、【付着・付属】は、「切る」しか持っていないのに対し、3 つの分断・破壊型動詞のいずれにおいても、【部分－全体】が中心となり、大多数の用例がこの関係にあたる。

(11) a.　山桃の樹に登って実をもいできた。　（BCCWJ, 坂東眞砂子著『桃色浄土』）
　　b.　この大柑子の皮を剥いてください。　（BCCWJ, 夢枕獏著『陰陽師』）
　　c.　目を剥く/歯を剥く。

(11a)は、【部分－全体】の典型例として、分離物 Y「実」は、分離元 X「樹」の一部であると捉えられる。それに対し、(11b)では、「剥く」の Y の範囲はより限定され、「皮」、「殻」などの全体を囲む表面のようなものであり、これは【パターン 3-1 表面－全体】にあたる。一方、(11c)は、物全体の表面を剥くという意味にとどまらない。この場合、「目」、「歯」を「みかんの果肉」のように想定し、実際に分離したのは、「目」、「歯」を包んでいる「まぶた」、「口」である。つまり、「まぶた」や「口」を分離したことで、隠された「目」や「歯」を出している。人間は、怒ったり驚いたりする時、このような動作・表情を伴う場合が多いため、これはメトニミーによって人間の感情を表す慣用句に拡張している例であると考えられる。

3.2.4. まとめ

以上、分離動詞における分離元と分離物の関係には、主に 3 つのパターンがある。表 4 に、各パターンの割合を示す。離脱型では、パターン 1 の割合が高いのに対し、分断・破壊型では、パターン 3 の割合が非常に高い。また、これらのパターンでは、X と Y の密着度に関して段階性が見られる。次節でその度合いについて論じる。

XとYの関係	離脱型分離動詞	分断・破壊型分離動詞
パターン1 付着・付属	75.3%	6.7%
パターン2 中身－容器	6.6%	
パターン2-1 状態－身体	1.2%	
パターン3 部分－全体	16.9%	65.6%
パターン3-1 表面－全体		27.8%

表4　2種類の分離動詞におけるXとYの関係パターンの割合

4. 一体性変化の行為連鎖

4.1. 一体性変化による解釈

前節は、離脱型分離動詞と分断・破壊型分離動詞におけるXとYの関係のパターンをそれぞれ考察した。次に、これらのパターンの間に、どのような共通性があるか、また、2種類の分離動詞の意味関係のスキーマはどのように異なるかを「一体性変化」で解釈したい。

変化事象の類型の1つとして、井本（2016）は、「一体性変化」という概念を提起し、次のように定義している。

(12)　実体の物理的・空間的・形状的なまとまり方に関する変化を「一体性変化」と呼ぶ。一体性変化は変化事象の下位類である。一体性変化が起こると変化主体は元のあり方では存在しなくなる（変化主体の同一性の喪失）。　井本（2016: 22）

2種類の分離動詞は、同様に分離元が元のあり方ではなくなるという一体性の状態変化を表すが、密着の度合いによって、その一体性のメカニズムが異なる。前節で述べたように、分断・破壊型のXとYの関係においては、【部分－全体】の割合が非常に高く、XとYは本来的に一続きのものとしてつながっている性質が見られる。すなわち、XとYの関係は、Yが存在した当初から、すでにXにつながっているため、XとYは本来的に連続体の性質を持つというスキーマにあたる。本稿は、このような一体性を「本来的一体性」と呼ぶ。

一方で、離脱型のXとYの意味関係のパターンでは、【付着・付属】の関係が中心となる。すなわち、XとYは本来的に連続体の性質に当てはまらず、何らかの操作のもとで、YがXに密着し、一体化して見えている。分断・破壊型における意味関係と比べると、離脱型の意味関係における一体性の程度は低く、本稿はこれを「擬似的一体性」と呼ぶことにする。

4.2. 力動性モデルに基づく行為連鎖の力的関係

次に、分離動詞における一体性変化の行為連鎖を力動性モデル（Talmy 2000）で分析する。

力動性とは、力という観点から見た際の個体の相互作用のことであるとされる。力の構造においては、本来的に活動か静止の傾向をもつ主動体と、主動体に対抗する力を加える対抗

体という 2 つの力実体が相互作用している。また、動作とその結果の生じる時間に応じて、使役と使役の結果が同時に生じるタイプ(13a, b)と使役において変化のプロセスが見られるタイプ(13c, d)という 2 つの下位タイプに分けられる。(13a, b)では、主動体「空気」と「丸太」は静止の傾向を持つが、それぞれの対抗体「扇風機」と「留め金」から継続的に強い力が加わることで、力が行使されている間において本来の内在傾向性と逆の傾向が生じる。一方、(13c, d)では、対抗体「ピストン」、「遮断バルブ」からそれぞれの主動体「油」と「ガソリン」に力が加わることで、力が行使されている間において主動体には状態変化が見られる。

(13) a. The fan kept the air moving.
b. The brace kept the logs from rolling down.
c. The piston made the oil flow from the tank.
d. The shutoff valve stopped the gas from flowing out. （Talmy 2000: 409-428）

本稿は、この力動性モデルに基づき、2 種類の分離動詞の行為連鎖を分析する。以下、図 1 は離脱型の力動性モデルを示し、その行為連鎖を(14)の 4 つの段階で記述した。

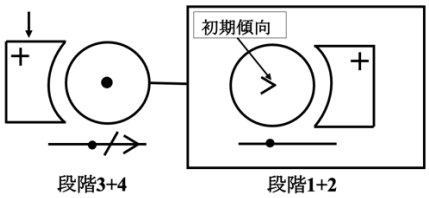


図 1　離脱型の力動性モデル

(14)　離脱型分離動詞の行為連鎖＝
段階 1：Y は本来的に活動する傾向にある（Y の初期傾向）。
段階 2：接触動作でこの傾向を阻止し X と Y は一体化して見える（活動→静止）。
段階 3：分離動作でその阻止力を外す（分離事象）。
段階 4：Y は活動できるようになる（静止→活動）。

図 1 の右側の枠は、段階 1 と段階 2 を示している。主動体 Y は本来的に X についておらず、自由に移動できる活動傾向にある。(13b)のように、対抗体からの継続的な力が加わることで、Y は X に付着・固定され、Y の活動を阻止する。また、左側は段階 3 と段階 4 を示している。(13c)のように、分離動作というより強い力を加えることで、Y は活動傾向に戻る。

一方、図 2 のように、分断・破壊型分離動詞の行為連鎖は(15)の 3 つの段階しか持たない。分断・破壊型における X と Y は本来的一体性の性質にあたり、1 つの連続体として、離脱型の初期傾向と異なり、Y は静止状態にある。また、(15)の行為連鎖では、(14)の段階 2 のような接触動作で傾向を阻止するプロセスがないため、接触動詞との関連性が喚起されにくい。

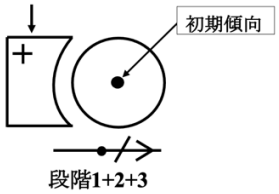


図 2　分断・破壊型の力動性モデル

(15)　分断・破壊型分離動詞の行為連鎖＝
段階 1：Y は本来的に連続体で静止する傾向にある（Y の初期傾向）。
段階 2：分離動作でこの傾向を変える（分離事象）。
段階 3：Y は活動できるようになる（静止→活動）。

5. 結論

本稿は、現代日本語における 2 種類の分離動詞の違いについて、分離元と分離物の関係の側面から考察し、各関係パターンとその割合を明らかにした。また、意味関係における密着度の段階性に関して、本来的一体性と擬似的一体性という概念を提起し、それぞれの特徴を記述した。そして、この 2 種類の一体性に基づき、力動性モデルで一体性変化の行為連鎖を検討したことで、分離物の初期傾向と段階の差を示し、接触動詞との反義関係の有無がどのように生じるかを説明できた。今後の課題として、構文的特徴などの他の視点から 2 種類の分離動詞の違いを考察し、意味的特性と構文的特徴はどのように関連しているかを分析する。

参考文献

Goldberg, Adele E. (1991) It Can't Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative, *BLS* 17: 368-378, University of California, Berkeley.

洪春子 (2020)「日中韓の「切る・割る」事象における語彙カテゴリー化の対照研究」『言語研究』158: 63-89.

井本亮 (2016)「「ケーキを大きく切った」をめぐって: 一体性変化の修飾」『商学論集』84(3): 17-35.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.

李響 (2016)「離脱動詞と移動動詞の比較: 「とれる」「おちる」を中心に」『言語学論叢』35: 75-86.

柴田武(編) (1976)『ことばの意味 1: 辞書に書いてないこと』東京：平凡社.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics Volume1: Concept structuring systems.* Cambridge, MA: MIT Press.

田中茂範 (1987)『基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ』東京：三友社出版.

田中茂範 (2011)『英語のパワー基本語: ネイティブ感覚の英語力アップ』東京：コスモピア.

日本語の語彙的複合動詞「V1＋詰める」の意味形成とその認知的メカニズム

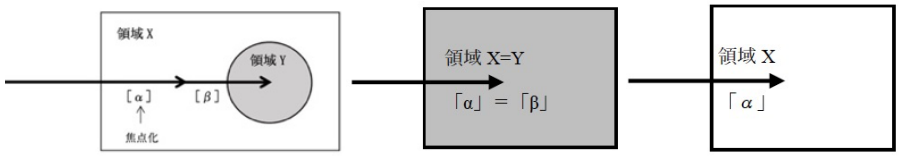
蘇　暁笛

1. 問題提起

現実世界の物理的空間概念は我々人間の身体感覚、日常経験に極めて深く根ざした一番基本的な認知基盤である。また、各言語共同体の社会・文化的枠組みと関わり合いながら、物理的空間概念を基盤とする言語表現は世界の諸言語において数多く存在すると思われる。その中、内・外の対比概念に基づく物理的空間移動を表す動的空間事態がさまざまな概念のソース領域となっている (Lakoff and Johnson, 1980) 。

日本語の語彙的複合動詞では、「～込む」、「～込める」、「～入れる」は外部から内部へという内部移動概念に基づく意味的に類似している後項動詞であると思われるが、それぞれの持つ具体的な意味構造が異なっている。松田 (2004) では、それらの間の意味的異同を、図 1 に示されるイメージ図式の領域構成 (領域 X と領域 Y[1]) と焦点化されるプロセス (領域 X に入るプロセス「α」と領域 Y に入るプロセス「β」) の違いから記述している。

(1)　人を車に｛押しこむ／押しこめる／?押し入れる｝。　(松田 2004: 80)



「押しこむ」　「押しこめる」　「押し入れる」

図 1: 「押しこむ」、「押しこめる」、「押し入れる」のイメージ図式

図 1 からわかるように、「～入れる」のイメージ図式では、領域 X とプロセス「α」としかないのに対し、「～込む」、「～込める」のイメージ図式では、2 つの領域と 2 つのプロセスが関わっている。この点から、「～入れる」と比べ、「～込む」と「～込める」は意味構造がより複雑であり、より多様な意味が生じることが予想される。この点に関して、姫野 (2018) による意味分類からも確認できる。姫野 (2018) によれば、「～入れる」は、「人がものを入れ物などの外から中に動かす」という自立語としての意味がそのまま残っており、メタファーという認知操作によって、物理的領域から抽象的領域への意味拡張が多く見られるが、意味的バリエーションから考えると、「～入れる」の表す意味は比較的に単一で、前項動詞は主に、何かを入れるための目的や方法などを表す。

[1] 領域 Y は領域 X 内の「難可逆的な領域」(＝主観的に、領域 X の外に出るのが困難だと感じられる領域であり、物理的に存在するわけではない) をイメージしたものである (松田 2004) 。

(2) a. その国は外国の文化をどんどん取り入れた。[2]
b. 家具を新居に運び入れた。

一方、「〜込む」、「〜込める」の意味的バリエーションはより高いことが表 2-3 からわかる。特に、「〜込む」は日本語の語彙的複合動詞の中で、数が一番多く、生産性が一番高い後項動詞であると多くの研究では指摘されている。「〜込む」、「〜込める」の意味構造には、純粋な内部移動だけではなく、領域 Y とプロセス「β」といった内部移動の後段階も含まれているからこそ、意味的多様性が生じたと言えよう。

「〜込む」の意味特徴		例
内部移動		「釘を柱に打ち込む」、「砂が米に混ぜ込む」
程度進行	固着化	「四時間も喋り込む」、「噂を真実と思い込む」
	濃密化	「人が老い込む」、「彼は咳き込んだ」
	累積化	「毎朝 15 キロほど走り込む」、「廊下を磨き込む」

表 2: 「〜込む」の意味分類 (姫野 2018:61-73 参照)

「〜込める」意味特徴	例
内部移動	「雨に降り込められる」
充満	「雲が垂れ込めている」
追い詰め	「子供が親をやり込めた」

表 3: 「〜込める」の意味分類 (姫野 2018:73-75 参照)

本稿では、日本語の複合動詞研究ではあまり注目されておらず、「〜込む」と同じ前項動詞と結合して類似した意味を持つ後項動詞「〜詰める」を取り上げる。「〜詰める」に注目する理由としては、以下の２点を挙げる。

- 「〜詰める」のタイプ頻度[3]は日本語の語彙的複合動詞の中に、それほど高くはないにもかかわらず、[4]意味的な広がりが見られる。それゆえ、「〜詰める」の意味構造にも「β」のような＋α 的な意味要素が存在すると予測できるだろう。

[2] 引用元が明記されていない例文は全て Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)、複合動詞レキシコンから収集したものである。
[3] 「タイプ頻度」という概念は「トークン頻度」とともに、用法基盤モデル (Usage-Based Model) において重要な概念である。個々の具体的な言語表現の生起例を数えることで得られる「トークン頻度」とは違って、「タイプ頻度」はどれだけ異なった種類の表現が出てきたかを数える (早瀬・堀田 2005: 79) 。本稿では、1 つの後項動詞と結合する前項動詞の数を指す。
[4] Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版) と国立国語研究所『複合動詞レキシコン』に収録されている項目を確認した結果、「〜詰める」のタイプ頻度は 15 である。(昇り詰める、登り詰める、上り詰めるは漢字表記の違いによるものであるため、タイプ頻度は 1 となる) 。

(3) 追い詰める、思い詰める、通い詰める、切り詰める、食い詰める、凍り詰める、敷き詰める、煎じ詰める、突き詰める、問い詰める、煮詰める、上り/昇り/登り詰める、張り詰める、引き詰める、見詰める (15 語)

· (4) のように、「〜詰める」は「〜込む」と同じ前項動詞と結合し、類似する意味が生じる場合もあれば、異なる意味が生じる場合もある。それゆえ、「〜詰める」にある「β」は「〜込む」にある「β」とは異なる特徴を示す。

(4) a. 上番者を故意に感染症にかからせ、瀕死の状態に｛追い詰める／追い込む｝ことを目的とする。
b. 果物と砂糖だけを｛煮詰める／??煮込む｝[5]ことで、とろりとした中にも果実の食感と味わいが強く残るジャムを作り上げます。
c. このままでは目標を果たせない、どうしたらいいだろう、と｛*思い込んで／思い詰めて｝犯行に及んだ。 (作例)

そこで本稿の目的は、「〜詰める」を特徴づける「β」とは一体何か、またそれと結合する前項動詞の特徴から「V1＋詰める」の意味形成の仕組みを解明することである。2 節では、関連する先行研究と疑問点を簡単に述べる。3 節では、本稿が援用する理論的枠組みを紹介する。4 節では、まず、単独動詞「詰める」の多義構造を確認した上で、後項動詞「〜詰める」との間の継承関係を明らかにする。また、「〜詰める」の持つ「限界」という意味要素と前項動詞の意味特徴から、「V1＋詰める」の意味形成のあり方を探っていく。5 節はまとめである。

2. 先行研究

まず、単独動詞「詰める」に関して、深田 (2003) は、「〜込む」、「込める」と同様、「詰める」も＜容器＞のイメージ・スキーマ[6]の機能的側面を顕在化させる言語表現であると主張している。図 4 が示すように、＜容器＞のイメージ・スキーマの主な構造的要素として、＜内部＞、＜境界＞、＜外部＞ がある。(Lakoff 1987: 272)

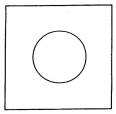


図 4: ＜容器＞のイメージ・スキーマ

[5] 例文に付けた“??”記号は、人によっては容認できるかもしれないが、ここでは、文脈にそぐわない意味になっている、また、他方に比べると違和感があるという状況を示すものとして用いている。
[6] 我々人間は自分の身体構造、また日常経験に基づき、「何かの中に何かがある」というイメージがよく浮かぶ。この抽象的なイメージを構造化したものが＜容器＞のイメージ・スキーマと呼ばれる。

また、＜容器＞のイメージ・スキーマは通常の空間的側面以外、機能的な側面もあると考えられる。Johnson (1987: 19-22) によると、この構造から、外部からの力を遮断する、外部から内部のものを守る、内部のものを固定する、内部のものを外部から見えなくするなどのような含意が導き出される。これらの含意は＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面と呼ばれ、一般に、容器性が高くなればなるほど、機能的側面が顕在化し、容器性が低くなればなるほど、機能的側面が希薄化し、単に＜境界＞として機能するようになる。(深田 2003)

(5) の「かける」と比べ、「注ぐ/注ぎ込む」の場合、＜息子＞が愛情を内部にためて保存することのできる対象、すなわち、ある種の容器として捉えられていることがわかる。これは＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面によって導き出されたものであると考えられる。また、 (6) の「入れる」と比べ、「込める」を用いる場合、弾がカラカラと動くことなくきちんと装填されたことを表すため、内部のものを固定するという＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化されている。

(7) の「詰める」は箱と共起できるが、平面的で、中に入れられたものを固定することができない「皿」とは共起できない。このことから、「詰める」も＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面を顕在化させる言語表現であると主張されている。

(5) 母親が息子に愛情を｛かける/注ぐ/注ぎ込む｝。
(6) 男は、ピストルに弾を｛入れた/込めた｝。
(7) ｛*皿/箱｝にりんごを詰める。 (深田 2003: 343-345)

しかしながら、(8) における「詰める」と共起する着点である「窓の隙間」、「コップの間」をある種の「容器」とみなすことは無理があると考える。この場合、「詰める」はかなり低い「容器性」を持っており、「窓の隙間」、「コップの間」は３次元の「容器」より、２次元の＜境界＞として機能していると言えるだろう。つまり、「詰める」と共起できる着点は、３次元「容器」であれ、２次元の「隙間」であれ、一定の範囲・限界を持つ場所でなければならないと考えられる。

(8) a. 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を詰めるとよい。
b. コップの間には樹脂製の緩衝剤がたくさん詰められていて、どれも割れずに届きました。

松本 (1997) では、「詰める」を移動に伴う付帯変化を包入した使役移動動詞として挙げられている。「詰める」の意味構造を動詞の行為連鎖で表示すると、［行為―変化―結果状態］となる。それと結合する前項動詞には、使役の手段を表すものが多くみられる。また、影山 (2013, 2021) によれば、「V1＋詰める」は「語彙的アスペクトの複合動詞」[7]に分類されるもので、V1 が意味の中心にあり、「～詰める」は V1 の動作や出来事の様子を描写するだけである。

さらに、影山 (2013, 2021) は語彙的アスペクト的複合動詞を 2 つのグループに大別して

[7] 影山 (2013) は、前項動詞と後項動詞の意味関係に基づき、語彙的複合動詞をさらに「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の 2 つに分類することを提案している。「アスペクト複合動詞」の場合、V2 は V1 を修飾し、V1 が表す事象のあり方について意味を補足する (影山 2013: 12) 。

いる。1 つは、V2 が V1 の事象に対して「開始」、「継続」、「中断」、「終了」などの時間的アスペクトの意味を付け加えるタイプであり、もう 1 つは V1 の出来事や動作の様子を V2 の動詞が副詞的に描写するタイプである。(9) の「煮詰める」は「煮ることを最後まで行う」に書き換えることができることから、V2「〜詰める」はここで「事象の終了・完遂」という時間的アスペクトの意味を表すと主張している。

(9) シロップを煮詰める ≒ シロップを煮ることを最後まで行う。(影山 2021: 160)

V2「〜詰める」と結合することによって、「煮る」という事象が終了することになるという説明は納得できるものだが、「事象の終了・完遂」は必ずしも後項動詞「〜詰める」の核の意味ではない。それより、最終的にどのような結果状態に達成すべきかのほうがより重要視されている。「煮詰める」の場合、「煮ることを最後まで行う」のような「事象の終了・完遂」は、「水分がなくなる」のような結果状態に達成するための手段として取り扱われているだけである。

本稿は、以上のような先行研究の知見を踏まえ、「詰める」と「〜詰める」を特徴づける本質的な意味特徴を探っていく。またそれに基づき、「V1＋詰める」の意味形成を考察する。

3. コア・アプローチ

田中 (1987) によると、多義というのは、その単語が持つ本来の意味より、具体的な使用文脈から推測したものを指すことが多い。1 つの多義語には、どのようなコンテクストの中でも変わらない核のような一定の意味が存在することが想定される。コア理論では、このようなコンテクスト情報を捨象した“context-free meaning”、複数のイグゼンプラの背後に潜む最大公約数的な意味を「コア」と呼ぶ (田中 1987: 32) 。

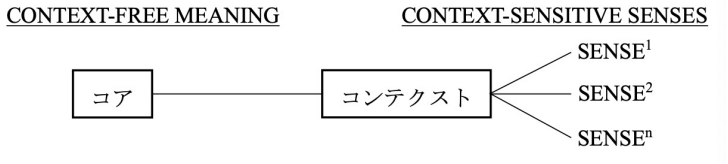


図 5: コアと語義 (田中 1987: 32)

コア・アプローチのほか、多義性を分析する際、プロトタイプ・アプローチもよく援用される。コアは“de-contextual”であるのに対し、プロトタイプは“contextual”であると考えられる。また、プロトタイプ・アプローチでは、典型的な中心義、また複数の語義の間の連続性が重視されており、中心義から放射状的なカテゴリーが形成されている。

本稿の分析対象「V1＋詰める」の後項動詞「〜詰める」は、単独動詞「詰める」との間に明確な継承関係があるため (詳しくは 4.1 を参照されたい) 、「V1＋詰める」の多義性を分析する際、プロトタイプ・アプローチより、コア・アプローチのほうがより有効であると考える。したがって、本稿は、「V1＋詰める」のコア的意味を記述したうえで、具体的にどのような前項動詞と結合するかによって、意味形成のあり方を分析していく。

4. 考察

4.1. 単独動詞「詰める」との継承関係

本節はまず、単独動詞「詰める」の意味について確認しておく。[8]図 6 からわかるように、国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』では、単独動詞「詰める」のコア的な意味

[8] 紙幅の都合上、本節は「V1＋詰める」の意味分析と主に関連する意味のみを取り上げる。

を「人が容器の限度いっぱいに、隙間なく物を入れる」と定義している。この場合、＜人が容器に物を詰める＞という文型が一般的とられている。

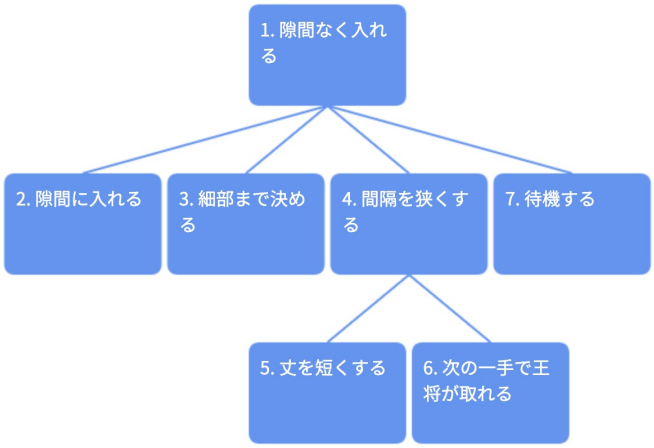


図 6: 「詰める」の意味拡張を視覚化した多義ネットワーク[9]

(10) (…) 時間が迫っていたので、大慌てでスーツケースに荷物を詰めた。[10] (語義 1)
(11) 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を詰めるとよい。 (語義 2)

(12) (…) 春までには計画を詰め、工事にとりかかる予定だ。 (語義 3)
(13) a. (…) 細かな字をびっしりと詰めて書く学生がいる。(語義 4)
b. 年配のご夫婦が並んで座れるように席を詰めてあげました。(語義 4)
(14) a. (…) どのスカートもぶかぶかなので、全部ウェストを詰めてもらった。 (語義 5)
b. 引き受けた仕事に失敗をすれば、小指を詰めなければならないなどということが、暴力団の世界では実際にあるのですか。(語義 5)

(10-11) とは異なり、(12-14) ではニ格場所句が明示されていない。語義 3 の場合、移動の着点はヲ格によって明示されており、着点目的語「計画」にもっと具体的な詳細を詰めるという抽象的な移動を意味する。この場合、「計画」は最終的に改善されるという状態変化があるため、壁塗り交替によって、「計画」は直接目的語の位置に現れることになる。また、(13) のコンテクストを分析すると、ヲ格目的語「字」、「席」[11]をその自体に「詰める」という意味合いになっている。 語義 4 の場合、ヲ格目的語は通常複数のものであり、それらの間の間隔を狭くすることによって、その全体が占める範囲が小さくなることが想定される。カットされたのように、全体としてのサイズは視覚的に短くなっている。一方、語義 5 がとるヲ格目的語は単数であり、「詰める」は「間隔を狭くする」のではなく、「丈を短くする」という意味となる。語義 4 から語義 5 への拡張は＜原因―結果＞に基づくメトニミーによって動機づけられていると考えられる。

2 節でも指摘したが、単独動詞「詰める」の意味には「容器」という要素が必ずしも関わっているわけではない。後項動詞「～詰める」に関しても、同じようなことが言えると

[9] 引用先は国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』 (https://verbhandbook.ninjal.ac.jp) である。
[10] 単独動詞「詰める」に関する例文 (13-17) はすべて国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』 (https://verbhandbook.ninjal.ac.jp) から引用したものである。
[11]「席を詰める」はより多くの人が座れるように 1 人分の座る範囲を狭めることを指す。しかし、実際に詰められたのは文字通りの「席」ではなく、「席に座っている人たち」である。つまり、このフレーズは、「席に座っている人たち」をそれと空間的隣接関係にある「席」を用いて表現するメトニミー的表現であると考えられる。

考える。

(15) 刑事は犯人を｛追い詰める/追い込む｝。(作例)
(16) このままでは目標を果たせない、どうしたらいいだろう、と｛*思い込んで／思い詰めて｝犯行に及んだ。 (＝ (4c))

(15) では、「追い詰める」と「追い込む」両方が容認されるが、どのような文脈でよく用いられるかは異なる。「追い詰める」を用いる場合、「犯人が逃走を続けていたが、刑事が綿密な捜査を行い、最終的に犯人を包囲し、逃げ場をなくした」のような物理的な状況が想定されやすい。一方、「追い込む」を用いる場合、「刑事が徹底的な尋問で犯人を追い込み、最終的には犯行を自白させた」という抽象的な状況が想定されやすい。また、DB[12]に収録されている実例において、「追い込む」のニ格の出現ページ数[13]は 802 ページであるのに対し、「追い詰める」は 33 ページしかない。つまり、「追い詰める」を用いる場合、必ずしも結果としての特定の場所・状態を提示する必要がなく、相手を不利の状況に陥れることが焦点となっている。一方、「追い込む」の場合、特定の場所・状態の提示が不可欠であり、そこにとどめることが焦点である。この点に関して、 (16) の容認度の差からも確認できる。「どうしたらいいだろう」からわかるように、「思い込む」が容認されないのは、「思う」の「内容物」がないからである。

したがって、本稿は、「～込む」を特徴づけるものは「容器性」であるのに対し、「～詰める」を特徴づけるのは「限界」であると主張したい。ここでは、V1 の表す行為をそれ以上行うことができないという意味で「限界」という概念を使用している。「～詰める」は「中途半端まで・途中まで・適当に」のような表現と共起しないのも「限界」という意味要素が働いているからである。これに基づき、本稿は「V1＋詰める」のコア的意味を＜限界まで V1 を行う＞と記述する。

4.2. 「限界」の意味を強調する「V1＋詰める」の意味形成

本節は、 (3) に挙げられた 15 個の「V1＋詰める」を分析対象とし、＜限界まで V1 を行う＞というコア的意味における「限界」は具体的にどのような限界を指すかによって、「物理的限界」と「抽象的限界」2 つの意味形成パターンに分けて考察していく。

ただし、 (17-18) の「切り詰める」と「引き詰める」には、単独動詞「詰める」本来が持つ語彙的意味 (語義 5) を保持しているため、「主題関係複合動詞」[14]に分類されるものであると思われる。以下の考察では、この 2 例を除外する。

(17) a. 放置しているよりはやはり枝を短く切り詰めるほうがよろしいでしょう。
b. 奥さんを信じ、家計を切り詰める覚悟を決めた。
(18) いつも髪を引き詰めるヘアースタイルをしていますとその部分が脱毛します。

4.2.1. 「物理的限界」

まず、「物理的限界」という意味要素に関わる「V1＋詰める」の意味形成について見ていく。

(19) a. 相手をコーナーに追い詰める時のガードしながら前進の戦法です。

---

[12] Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版) を指す。
[13] DB は Web データの性質を考慮して、格要素は出現頻度ではなく、「出現ページ数」で計測している。なお、まったく同一の用例は、複数の Web ページに出現していたとしても、出現ページ数 1 とカウントしている。
[14]「主題関係複合動詞」は「V1 が V2 を修飾することで、「V1 て、V2」が持つ様々な意味に解釈される」とされている (影山 2013: 12) 。

b. ないものねだりや高望みをしていると却って自分を追い詰める結果になってしまうので…

(20) a. 柱の外側に板状の断熱材を途切れることなく張り詰めるのが「外断熱」です。
b. 映像的な気持ち悪さではなく緊張感が張り詰める心理的な怖さ。

(21) a. 階段を上り詰めると、広くはないが砂利の敷き詰められた境内がある。
b. 菅直人氏が草の根から政治活動を初めて、今日、総理大臣の地位に上り詰めたことは事実だ。

(22) マットの下に防音シートを敷き詰める。

(23) 問題をさらに詳しく突き詰めると、本質的な課題にぶつかります。

(19a, 20a, 21a, 22) はすべて物理的移動を伴っている表現である。「追い詰める」、「張り詰める」、「上り詰める」はメタファーによって、 (19b, 20b, 21b) のような抽象的領域でも用いられる。 (23) の「突き詰める」は問題・原因・本質・物事のような目的語と共起し、抽象的な領域でしか用いられないが、前項動詞「突く」自体がメタファー的拡張されているため (cf.「ポイントを突く」) 、「突き詰める」の原点には物理的移動があると考えられる。

前項にくる動詞「追う」、「張る」、「上る」、「敷く」、「突く」はすべて運動性 (非状態性) と意志性を持つ活動動詞[15]であり、「限界」に達成する手段として捉えられる。「～詰める」と結合することによって、完了性 (非継続性) と変化の結果を持つようになると考えられる。

	状態動詞 (State Verbs)	活動動詞 (Activity Verbs)	到達動詞 (Achievement Verbs)	達成動詞 (Accomplishment Verbs)
完了性	－	－	＋	＋
運動性	－	＋	－	＋
意志性	－	＋	－	＋
変化の結果	－	－	＋	＋

表 7: Vendler (1967) の 4 種の動詞の意味素性 (表は (吉田 2012: 43) を引用)

(19-23) からわかるように、 他動詞「追い詰める」、「敷き詰める」の場合、移動物は目的語の位置、動作主は主語の位置に表れている。動作主は、移動物を収容する物理的スペースをなくすために、V1 の行為を行うことを表す。自動詞「上り詰める」の場合、移動物は主語の位置に現れている。移動物は、V1 という行為を行う物理的スペースがなくなるまで、ずっと V1 という行為を行うことを表す。「張り詰める」は他動詞的用法と自動詞的用法両方を持つ語彙項目である。また、「突き詰める」の場合、「本質的な課題」は通常「問題」という抽象的な空間スペースの一番奥にあるため、「本質的な課題」よりもっと奥のほうに突くことができないことを表す。

したがって、これらの「V1＋詰める」の意味形成には「物理的限界」という意味要素が働いていると考えられる。

4.2.2. 抽象的限界

前述した 4 語と同様に、 (24) の 8 語の V2「～詰める」は V1 の事象を副詞的に修飾し、V1 が表す事象のあり方について意味を補足している。一方、前述した 4 語とは違って、(24) の 8 語にはなんらかの空間的な移動が存在しておらず、ある種の「抽象的限界」が働いていると考えられる。

[15] Vendler (1967) の動詞 4 分類 (状態動詞、活動動詞、到達動詞、達成動詞) の 1 つである。

(24) 思い詰める、通い詰める、食い詰める、凍り詰める、問い詰める、見詰める、煎じ詰める、煮詰める (8 語)

空間的な移動が伴っていない点から、これらの「V1＋詰める」を特徴づける「限界」は抽象的なものであると主張しているが、どのような意味で抽象的であるかに関しては、前項動詞の意味特徴、また使用文脈を確認する必要がある。

(25) 単なる偶然に過ぎないことを、ここまで深く思い詰めるのが、自分の悪癖であることは重々承知している。
(26) 頻繁にお店に通い詰めると店員に顔を覚えられることもしばしば。
(27) 彼は都会で食い詰めて、田舎に帰った。
(28) 味方のオウンゴールで、一瞬、競技場が凍り詰めたように静まった。
(29) 数子は美和に理由を問い詰めるが、美和はその理由をなかなか話さない。
(30) a. パソコンの前に座り、じっと画面を見詰める。
b. 深く自分を見詰める為には、深い人生経験が要求されている。

(25-30) のコンテクストを確認すると、これらの「V1＋詰める」の意味解釈はすべて主観的な程度問題と関わっており、「物理的限界」のような、一定の客観的な基準が存在するわけではない。「思い詰める」は「あまり」、「そんなに」、「ほど」、「深く」のような副詞的修飾語と共起し、人間の意識・思考の限界まで思考することを表す。マイナスな文脈でよく用いられる。また、「通い詰める」は、「毎日」、「連日」、「頻繁に」などのような時間的修飾語と共起し、一回きりの行為ではなく、「通う」という行為を複数回行うことを表すため、ここでの「抽象的限界」は回数の限界を指すと考えられる。

(27) の「食い詰める」の場合、「食う」は「生活する」、「生計を立てる」という意味として用いられている (cf. 「音楽だけで食っていけない」) 。「食い詰める」は、貧困状態の限界に達し、それ以上食べていけることができないことを表す。 (28) では、「凍り詰める」がメタファー的に用いられている。温度が下がると、より硬く凍ることが予想されるため、「凍る」程度の限界を表す。(29) の「問い詰める」は、相手が真実を言うまで、「問う」という行為を長時間・継続的に行うことを表す。

(30) の「見詰める」は、対象となる目的語によって、異なる解釈になる。(30a) 目的語は「パソコンの画面」であるため、「見る」という行為を長時間・継続的に行うことを表す。時間の限界であると言える。これに対し、 (30b) において、「見詰める」対象は「自分」であり、「本質的な自分」を見つけるため、「自分」の奥まで視線が移動することが想定される。この場合、「抽象的限界」より、「物理的限界」に関わっていると考えられる。

「煎じ詰める」、「煮詰める」は料理作りの場面以外に、(31-32) のような文脈でもよく用いられる。これは、単独動詞「詰める」の語義 3 から継承された用法として捉えることができるだろう。

(31) ゴミ問題を煎じ詰めると環境問題に行き着く。
(32) 彼らはこの案をじっくり煮詰めた。

以上の分析からわかるように、「抽象的限界」は具体的に何を指すかは前項動詞の意味特徴によって異なる。また、それらの「抽象的限界」に達するために、具体的に V1 の行為をどのように行うかも異なってくる。このような性質があるからこそ、「V1＋詰める」には多様な意味解釈が拡張されると考えられる。

5. まとめ

本稿は、「V1＋詰める」の意味形成を考察するには、まず単独動詞「詰める」の多義構

造を確認した。また、「～込む」の使用状況との比較を通して、単独動詞「詰める」と後項動詞「～詰める」を特徴づけるのが「限界」であることがわかった。その間の継承関係に基づき、「V1＋詰める」のコア的意味を＜限界まで V1 を行う＞と記述した。最後は、前項動詞に空間的移動が伴うか否かなどの意味特徴によって、「限界」という意味要素はさらに「物理的限界」と「抽象的限界」に分けることができることについて論じた。

参考文献

影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社.

影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系」、影山編『複合動詞研究の最前端―謎の解明に向けて』、3-49.

影山太郎 (2021) 『点と線の言語学―言語類型から見えた日本語の本質―』くろしお出版.

田中茂範 (1987) 『基本動詞の意味論―Lexico-Semantics of English Basic Verbs: Exploration into Lexical Core and Prototype』三友社.

田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』研究社.

姫野昌子 (2018) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究－認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房.

深田智 (2003) 「イメージ・スキーマを介した言語意味論へのアプローチ」『認知言語学会論文集』3、343-346.

Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George, and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors We Live by.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論― 言語から見た人間の心』紀伊国屋書店.)

Vendler, Zeno. (1967) *Linguistic in Philosophy,* Cornell University Press.

コーパス

Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)

(https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php)

国立国語研究所『複合動詞レキシコン』 (https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/)

国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』(https://verbhandbook.ninjal.ac.jp)

Locative Sense "Point" of the English Preposition *At* - A Comparison with the French Preposition *À* - *

TAO Shunsuke, KAJIWARA Kuriko

1. Introduction

Prepositions deliver locative information that extends to other related meanings, such as temporal senses. As for the English preposition *at*, it has the locative sense "point," which is often regarded as its central meaning.[1] Examples are presented in (1): In (1a), *at* introduces the designated place, *10 Victoria Street* as if the speaker of the sentence targeted it on a route map. In (1b–1d) see *the station*, *a party*, and *home* comprehensively, including both the inside and the near outside of the building or room.

(1) a. They live at *10 Victoria Street*.[2] (Ando 2012: 12)
b. I arrived at *the station* just in time. (*ibid.*)
c. We met at *a party*. (*ibid.*)
d. I would rather stay at *home*. (*ibid.*)

Similar to the English preposition *at* in (1), it is often said that French preposition *à* has its central meaning "point," as in (2).

(2) a. Ils habitent au *10 rue Victoria*.[3] (French translation of (1a))
b. Je suis arrivé à *la gare* juste à temps. (French translation of (1b))
c. Nous nous sommes rencontrés à *la fête*. (French translation of (1c))
d. Je préfère rester à *la maison*. (French translation of (1d))

It seems that the English preposition *at* and French preposition *à* are equivalent in terms of their locative sense "point," but there are some differences of the way they construe a point. Although (3a, 3c) show that other English prepositions such as *in* or *on* rather than *at* are suitable, their French translations (3b, 3d) use the French preposition *à*.

(3) a. He lives in *London*. (Ando 2012: 42)
b. Il habite à *Londres*. (French translation of (3a))

* This work was supported by JST SPRING, Grant Number JPMJSP2138. We would like to thank Editage (www.editage.com) for English language editing as well.

[1] However, the discussion of the central sense of English preposition *at* is controversial. For example, Tanaka et al. (2006: 55, 58) insist that the core meaning is "place," which covers the usages of *at* more exhaustively.

[2] All underlining and italicizing were done by the authors.

[3] *Au* is composed of French preposition *à* and French masculine singular definite article *le*.

c. There was a fly on *the ceiling*. (Ando 2012: 72)

d. Il y avait une mouche au *plafond*. (French translation of (3c))

Accordingly, this paper discusses the dissimilarity in the locative usages of the English preposition *at* and French preposition *à*, and clarifies each range regarding "somewhere" or "something" as a point.

The remainder of this paper is organized as follows. Section 2 surveys previous studies on the locative meanings and usages of the English preposition *at* and French preposition *à*. This section also presents the main issue discussed in this study. Section 3 analyzes the difference in the construal of the locative point between the two prepositions. In particular, we focus on the size and particularity of a place. Section 4 concludes that in comparison with *à*, the locative point introduced by *at* tends to require a concrete or specific place with extra context or information to infer its surrounding area.

2. Previous Studies

2.1. Locative Meanings and Usages of the English Preposition *At*

Many researchers say that the English preposition *at* means a certain point with regard to place. Consider the example (4) below. Examples (4a–4d) show the exact single point of two overlapping lines (*the crosswalk*), top (*the summit of the mountain*), end of a line (*the end of the street*), or current page of a book (*page ten*). In addition, *at* can refer to the area around a point (cf. Saito (2015: 484–485)).[4] In (4e), the person (*I*) who waits may not stand right on *the ticket gate* but near the gate. (4f) indicates that *the back door* is a kind of entrance to a house or building and not just *the back door* itself. Furthermore, (4g–4h) can express the adjacent outside of the designated area (i.e., *the station* or *home*) as well as the inside.

(4) a. She stopped at *the crosswalk*. (Tanaka et al. (eds.) 2003: 96)

b. There is a temple at *the summit of the mountain*. (Saito 2015: 484)

c. There is a police-station at *the end of the street*. (*ibid.*)

d. Let us begin at *page ten*. (Ando 2012: 12)

e. I'll wait at *the ticket gate*. (Tanaka et al. (eds.) 2003: 96)

f. The burglar entered at *the back door*. (*ibid.*)

g. I arrived at *the station* just in time. (=(1b))

h. I would rather stay at *home*. (=(1d))

Interestingly, compared with (5a), contextual conditions make the use of the preposition *at* more appropriate, as shown in (5b). Herskovits (1986: 131) states that the context that first comes to mind is not fully sufficient.

[4] In this respect, Saito (2015: 484) points out that *at* is more "indefinite" than *in*.

(5) a. ?The restaurant is at *the village*. (Herskovits 1986: 131)

b. There is a good restaurant at *a village 6 miles from here*. (*ibid.*)

However, as in (6a–6b), when the place is a town or country, the preposition *in* is more suitable than *at*. This is partly because they tend to be regarded as a broad place, but (6c) exemplifies that *at* can be used when the place is seen as a point, such as a relay point or destination (Taishukan's Unabridged Genius English Japanese Dictionary).[5] Herskovits (1986: 129) also says that (6d) is acceptable, but it needs "the selection of a bounded part of *the freeway*."

(6) a. He lives in *London*. (=(3a))

b. *at *England/California/the county/the neighborhood/...* (Herskovits 1986: 130)

c. We arrived at/in *Tokyo* – at *Shimbashi* – in *Japan*. (Saito 2015: 484)

d. The gas station is at *the freeway*. (Herskovits 1986: 129)

Thus, the English preposition *at* allows us to view a contextually restricted place as a point and assume a larger area near that point.

2.2. Locative Meanings and Usages of the French Preposition *À*

Similar to the English preposition *at*, it is said the French preposition *à* refers to a spatial point. (7a–7b) indicate the position of the post-office (*la poste*) or the present page of a book (*page 5*) as a point, respectively. In (7c), the house (*la maison*) expresses the place where someone currently exists, regardless of whether the person is inside or closely outside the house. Conversely, (7d) refers only to the interior of a house. This is why (7c) is treated in the same way as its English equivalent in (4h).

(7) a. La poste est à *cent mètres d'ici*. (Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais)
the post-office is at one-hundred meters from-here
"The post-office is 100 meters away from here."

b. Regardez à *la page 5*. (Shogakukan Robert Grand Dictionnaire Français Japonais)
look at the page 5
"Look at the page 5."

c. être à *la maison* (Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais)
be at the house
"be at home"

[5] In other words, we can assume a route that contains Tokyo station when we say, "*we arrived at Tokyo*." Huddleston and Pullum (2002: 651) propose the concept of "implicit paths."

d. être dans *la maison*
be in the house
"be in the house"

À also introduces a place in a general way. Examples (8a–8b) see the cities *Tokyo* and *Paris* as general places. By contrast, (8c) means that someone has lived in many specific places in *Paris*. Furthermore, the restaurant in (8d) is a general one, while that in (8e) is a specific one (as depicted by the adjective word *célèbre* "famous").

(8) a. Il est né à *Tokyo*. (Shogakukan Robert Grand Dictionnaire Français Japonais)
he is born at Tokyo
"He was born in Tokyo."

b. habiter à *Paris* (Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais)
live at Paris
"live in Paris"

c. habiter dans *Paris* (*ibid.*)
live in Paris
"live all over Paris"

d. dîner au *restaurant* (Shogakukan Robert Grand Dictionnaire Français Japonais)
eat at-the restaurant
"eat at the restaurant"

e. dîner dans *un restaurant célèbre* (*ibid.*)
eat in a restaurant famous
"eat at a famous restaurant"

Therefore, the French preposition *à* provides a way of looking at a general place as a point.

2.3. Summary and the Issue at Present

The English preposition *at* and French preposition *à* are alike in the locative sense of a point. However, it can be thought that the ways of construing a place as a point are different from each other. This dissimilarity is exemplified in example (9), and the main issue is why English expressions (9a, 9c) do not use *at*, while French expressions (9b, 9d) use *à*. This study addresses this issue from a cognitive semantic perspective.

(9) a. He was born in *Tokyo*.
b. Il est né à *Tokyo*. (=(8a))

c. live in/*at *Paris*

d. habiter à *Paris* (=(8b))

3. Difference in Construal of Locative Point between the English Preposition *At* and French Preposition *À*

This section investigates the difference between the English preposition *at* and French preposition *à*, with special reference to their methods of locative point construal. Section 3.1. discusses the size of the places to which these two prepositions can refer. Section 3.2. focuses on the particularities of a place. Finally, section 3.3. provides a reconsideration of the points made by the two prepositions.

3.1. Size of a Place

In English, the preposition *in* matches a broader place and allows the speaker of the sentence to feel its spatial extension. Huddleston and Pullum (2002: 650) point out that *at* in (10b) becomes more suitable as the speaker or viewer moves further away from the situation. This is because the speaker does not perceive the spatial extension of the supermarket from a distance.

(10) a. John is in *the supermarket*. (Huddleston and Pullum 2002: 650)

b. John is at *the supermarket*. (*ibid.*)

In French, however, the preposition *dans*, which seems to be equivalent to the English preposition *in*, is not used in the same way. In (11a), *Tokyo* is a place whose spatial extension can be felt, but its French translation in (11b) uses *à* instead of *dans*.

(11) a. He was born in *Tokyo*. (=(9a))

b. Il est né à *Tokyo*. (=(9b))

À is used in the following example (12) as well. We can say that *à* is not incompatible with spatial extensions.[6]

(12) Le soleil se lève à *l'est*. (Hakusuisha Larousse Dictionnaire Français Japonais)
the sun oneself raise at the-east
"The sun rises in the east."

Meanwhile, when using *dans*, the additional meanings "the clearly distinguished inside" or "all over"

[6] Therefore, French preposition *à* can be translated into English prepositions *to*, *at* or *in* (Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais).

can be given like in (13b, 13d, 13f).

(13) a. Mon frère est à *Paris*. (Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais)
my brother is at Paris
"My brother is in Paris."

b. Il doit être dans *le coin*. (*ibid.*)
He should be in the neighborhood
"He should be in the neighborhood."

c. Le soleil se lève à *l'est*. "The sun rises in the east." (=(12))

d. Ce quartier se trouve dans *l'est de Paris*.
(Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais)
this district oneself find in the-east of Paris
"This district is located in the east of Paris."

e. habiter à *Paris* "live in Paris" (=(8b))

f. habiter dans *Paris* "live all over Paris" (=(8c))

It can be said that *dans* needs the spatial extension and then focuses on the components within the space, which can cause the additional meanings "the clearly distinguished inside" or "all over." However, spatial extension alone does not fully explain the differences between *à* and *dans*. This also gives us a cue to discover the discrepancy between the English preposition *at* and French preposition *à*. *At* is inconsistent with the spatial extension, whereas *à* is consistent. Table 1 summarizes this relationship.

Table 1: A Comparison of the English preposition *at* and French preposition *à* in terms of the spectrum of construing a place as a point

prepositions		size of a place	
		small	large
English	*at*	←——→	
French	*à*	←————————→	

3.2. Particularity of a Place

The English preposition *at* is different from the French preposition *à* in the particularity of indicating a place. In that respect, *at* is similar to the French preposition *dans.* First, let us consider the usage of *at* in the following examples (14) and (15): The conditional context of *6 miles from here* is added in (14b), and the whole sentence is more acceptable than a sentence without such context.

Moreover, it is not preferable for the pronoun *it* to follow *at*, as shown in (15).

(14) a. ?The restaurant is at *the village*. (=(5a))
b. There is a good restaurant at *a village 6 miles from here*. (=(5b))

(15) a. (He is at the station.) *She is at *it*, too.
(Taishukan's Unabridged Genius English Japanese Dictionary)
b. (He is in the station.) She is in *it*, too. (*ibid.*)

It is also important that in (16), the route is presumed, and *Tokyo* and *Chicago* are seen as one of the stops when *at* is used.

(16) a. We arrived at/in *Tokyo* – at *Shimbashi* – in *Japan*. (=(6c))
b. The party stopped at *Chicago* on its way to New York.
(Taishukan's Unabridged Genius English Japanese Dictionary)

As for the English preposition *in*, it is normally assumed that the place introduced is where events or activities are conducted, and it does not matter whether the place is large or small (Taishukan's Unabridged Genius English Japanese Dictionary). Therefore, *at* tends to require a supplementary conditional context or restricted situation.

(17) a. He lives in *London*. (=(6a))
b. The baby is sleeping in *the cradle*. (Herskovits 1986: 149)

However, the French preposition *à* does not require such a context as the English preposition *at*. The sentences in (18) indicate that *dans* rather than *à* is likely to refer to concrete and individual places. For example, the expression *à université* is used in (19a) when we want to discuss a university in general (Hakusuisha Larousse Dictionnaire Français Japonais).

(18) a. dîner au *restaurant* "eat at the restaurant" (=(8d))
b. dîner dans *un restaurant célèbre* "eat at a famous restaurant" (=(8e))

(19) a. Il étudie à *université*. (Hakusuisha Larousse Dictionnaire Français Japonais)
he study at university
"He studies in university."
b. Il étudie dans *une université de province*. (*ibid.*)

he study in a university of provinces
"He studies in a university in the provinces."

It can be thought that the meanings "the clearly distinguished inside" or "all over" possibly added by using *dans*, which was discussed in the previous section, are related to this restriction.

(20) a. Ce quartier se trouve dans *l'est de Paris*. "This district is located in the east of Paris." (=(13d))
b. habiter dans *Paris* "live all over Paris" (=(13f))

The discussion in this section is summarized in Table 2. The English preposition *at* and French preposition *dans* tend to require specific locative information. Considering Table 1, *at* and *dans* can cover a shorter spectrum of the size of a place than *in* and *à*, respectively.

Table 2: A relationship between the English prepositions *at*, *in* and French prepositions *à*, *dans* in terms of the particularity of a place (the shade parts show the semantic restriction)

English prepositions	*at*	*in*
French prepositions	*à*	*dans*

3.3. Reconsidering Locative Sense "Point" by the English Preposition *At* and French Preposition *À*

We now focus on the difference in the locative sense "point" between the English preposition *at* and French preposition *à*. It is true that these two prepositions indicate a locative point, but what is regarded as this point differs. The English preposition *at* selects and restricts a place as a point concretely, so that it is likely to need extra context or information, as in (21b) and (22).

(21) a. ?The restaurant is at *the village*. (=(14a))
b. There is a good restaurant at *a village 6 miles from here*. (=(14b))

(22) (The speaker is away from the situation) John is at *the supermarket*. (=(10b))

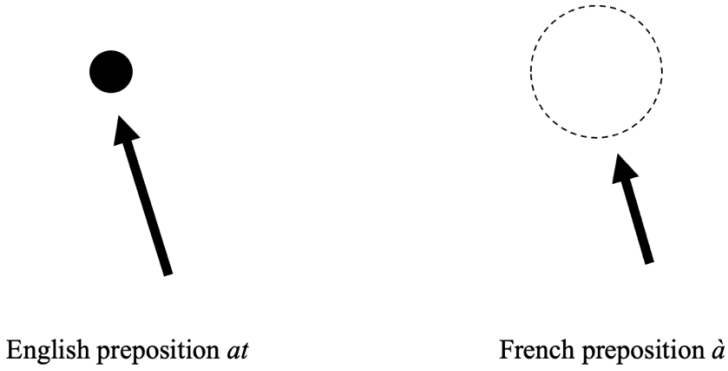
The French preposition *à*, however, indicates a place as a point abstractly or generally, like in (23). Thus, the ways of making locative sense "point" are different between *at* and *à*, as illustrated in Figure 1.

(23) a. Mon frère est à *Paris*. “My brother is in Paris.” (=(13a), cf. (13b))

b. dîner au *restaurant* “eat at the restaurant” (=(18a), cf. (18b))

c. Il étudie à *université*. “He studies in university.” (=(19a), cf. (19b))

Figure 1: Difference in construal of locative point between the English preposition *at* and French preposition *à*



4. Conclusion and Prospects

From the above discussion, this paper concludes that the English preposition *at* has a locative sense “point,” which is brought by the concrete restriction of a place possibly with conditional contexts or extra information. In contrast, the French preposition *à* does not have such restrictions. However, this paper does not consider the other meanings and usages of these prepositions, such as in their temporal sense. This discussion needs to be refined for future research.

References

Ando, S. (2012) *Eigo no Zenchishi.* [*English Prepositions.*] Tokyo: Kaitakusha.

Herskovits, A. (1986) *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Saito, H. (2015) *Jitsuyou Eibunten.* [*Practical English Grammar.*] Nakamura, M. (Trans.). Tokyo: Kaitakusha.

Tanaka, S., Y. Sato and H. Abe (2006) *Eigo Kankaku ga Minitsuku Zissen-teki Sidou: Koa to Chanku no Katsuyou-hou.* [*Practical Instruction on English Sense: The Application of Core and Chunk.*] Tokyo: Taishuukan.

Tanaka, S., S. Takeda and S. Kawade (eds.) (2003) *E-Geito Eiwa Jiten.* [*E-Gate English Japanese Dictionary.*] Tokyo: Benesse Corporation.

Dictionaries

(English)

Konishi, T. and K. Minamide (eds.) (2001) *Jiiniasu Ei-wa Dai-Jiten.* [*Taishukan's Unabridged Genius English Japanese Dictionary.*] Tokyo: Taishukan.

(French)

Kurakata, H., Y. Togo, Y. Haruki and M. Ohki (2010) *Puti Rowaiyaru Futsu-wa Jiten.* [*Nouveau Petit Royal Dictionnaire Français Japonais.*] Tokyo: Obunsha.

Miyake, N., Y. Rokushika and F. Dhorne (eds.) (2001) *Raruusu Futsu-wa Jiten.* [*Hakusuisha Larousse Dictionnaire Français Japonais.*] Tokyo: Hakusuisha.

Shogakukan (ed.) (1988) *Robeeru Futsu-wa Dai-Jiten.* [*Shogakukan Robert Grand Dictionnaire Français Japonais.*] Tokyo: Shogakukan.

BA Imperative Conditional in Modern Japanese
—With a Focus on Distributional Aspects—*

SETO Yoshitaka

1. Introduction

Japanese conditionals have been extensively studied, and this study aims to examine the semantic aspect of a Japanese conditional that features a clause linkage marker, *ba*.

(1)	Sensei-ga	ire-ba	aisatsu	shinasai.
	teacher-NOM	exist-CLM	greet	do.IMP

'If the teacher is (there), greet them.'

The example (1) represents BA imperative conditional, where the main predicate is in the imperative mood, and the predicate in the subordinate clause is filled with *iru* in hypothetical conjugational form. The current study will refer to the position filled by the predicate in the subordinate clause as $SLOT_1$, and that in the main clause as $SLOT_2$. BA imperative conditional in Modern Japanese is recognized as having a limited distribution of lexemes in $SLOT_1$, and non-stative verbs are typically not allowed in this position (National Institute for Japanese Language and Linguistics 1964; Masuoka 1993).

The investigation of the prototypical semantic aspects of the lexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ has been limited, and the specific semantic relation between the two clauses has not been fully explored. By examining salient lexemes in each clause and characteristic combinatory patterns of lexemes, we aim to advance the descriptive work on BA imperative conditional.

In the following section, the current study attempts to identify salient lexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ to unveil specific constructional aspects of BA imperative conditional.

2. Methodology

To identify the semantic attributes of $SLOT_1$ and $SLOT_2$ in BA imperative construction and their semantic association, we employed word2vec (Mikolov, Yih, and Zweig 2013), hierarchical clustering, and collostruction analysis to identify representative lexemes for each slot.

The data for this study on BA imperative conditionals were obtained from Balanced Contemporary Corpus of Written Japanese (BCCWJ) (The National Institute for Japanese Language and Linguistics 2015) as follows: First, sentences contained in BCCWJ were tokenized using GiNZA NLP Library version 4.0. (Matsuda, Oomura, and Asahara 2019). This enabled the identification of

* This research was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 19K13189.

the predicate in the protasis and apodosis of the conditional being studied by obtaining the dependency relation between morphemes in each sentence. After filtering instances of BA imperative conditionals, the rows in a word2vec table that corresponds to the words in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ were extracted. Additionally, collostruction analysis was employed.

Collostruction analysis has been used extensively to identify specific representative lexemes in construction in both corpus and cognitive linguistics literature. This study employed two types of collostruction analysis: simple collexeme analysis (Stefanowitsch and Gries 2003) and covarying collexeme analysis (Stefanowitsch and Gries 2005). The former measures the strength of the collocation between an item in a construction and the construction itself, while the latter measures the strength of the collocation between two lexemes within the construction. This study employed simple collexeme analysis to identify words in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ strongly connected with BA imperative conditionals in Modern Japanese. Furthermore, covarying collexeme analysis was conducted to determine the semantic relationship between the collexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ of the conditionals under study. The 'collostructions' R package version 0.2.0. (Flach 2021) was utilized for these tests. The lexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ were respectively defined as the collexeme for simple collexeme analysis. For example, in (2), '*tai,*' the base form of '*takere-*' in the protasis, and '*nigeru,*' the base form of '*nigero,*' were defined as the collexeme of simple collexeme analysis. In the covarying collexeme analysis, both words in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ were defined as the collexemes simultaneously.

(2) Nige-takere-ba nigero-yo.
escape-want.IRR-CLM escape.IMP-SFP[1]
'If you want to run away, run away.' (BCCWJ LBh9_00086)

In addition, the collected collexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ were extracted from a word2vec model, chiVe (Manabe et al. 2019). A word2vec model is used to represent words as numerical vectors in a multi-dimensional space. It is typically represented as a table, where each row corresponds to a specific word, and each column represents a specific feature or aspect of the word. The fundamental premise of word2vec is that words with similar meanings are represented by a similar array of vectors in the model. This feature has made word2vec a widely-used tool in natural language processing (NLP) for a variety of applications, including text classification and machine translation. Models of word2vec are constructed from collocational information of a large text database, and chiVe was trained from NINJAL Web Japanese Corpus (NWJC). The lexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ were extracted separately from chiVe. When a lexeme in $SLOT_2$ was not contained in chiVe or too general,

[1] The abbreviations used in this paper are as follows: ADV: adverbial, COP: copula, CLM: clause linkage marker, HON: honorifics, IMP: imperative mood, NEG: negation, NMLZ: nominalizer, NOM: nominative, SFP: sentence-final particles.

a word with a similar meaning was extracted from chiVe, or a word dependent on the lexeme in SLOT$_2$ was substituted in the position.

(3) … pochi-tto shi-te-kudasai
pochi.ADV do-CLM-give.IMP
'..., please click.' (BCCWJ OY14_27547)

For example, in sentence (3), the original text contained the adverbial form of *suru* (do), *shi*, in SLOT$_2$. However, since *shi* is too general and does not accurately convey the meaning of pushing in the sentence, and *pochi-tto*, an adverb used to express the action of pushing, was selected as a better fit for SLOT$_2$. In this case, *pochi-tto* was defined as the lexeme in SLOT$_2$. The lexemes in each slot were then submitted to Rtsne (Krijthe and Van der Maaten 2022), which projected the high-dimensional data onto a two-dimensional space, enabling words with similar distributional profiles to be placed close to each other.[2] Finally, hierarchical clustering was used to visualize the relationships between the lexemes.[3]

3. Results

The retrieval of BA imperative conditional resulted in 1,195 instances with 19 types of lexemes in SLOT$_1$ and 105 types in SLOT$_2$. The result of simple collexeme analysis showed that 17 types of lexemes in SLOT$_1$ are attracted to the construction, with 13 significantly attracted lexemes. Figure 1

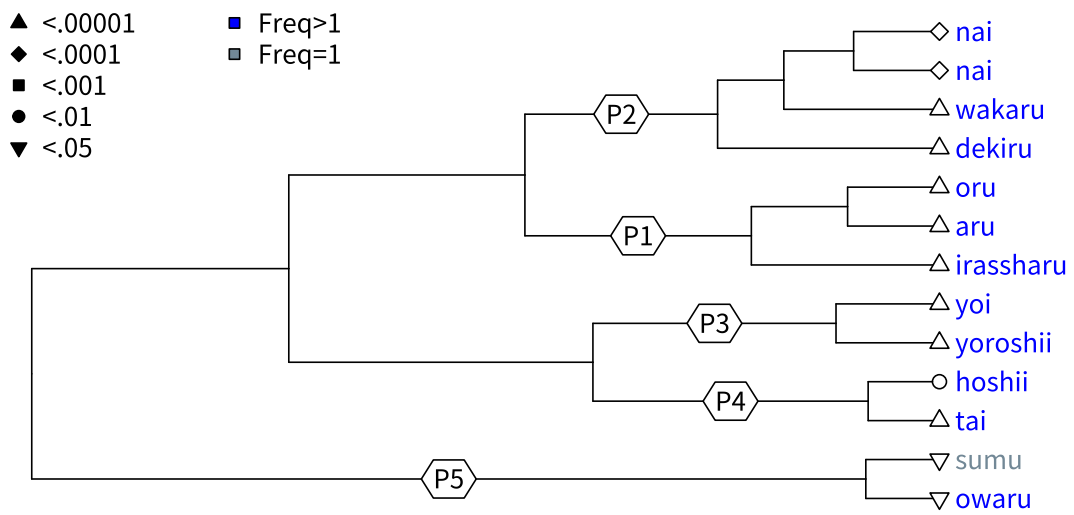


Figure 1. Lexemes in SLOT$_1$ of BA imperative conditional.

[2] The t-SNE algorithm was executed for 1,000 iterations using a perplexity parameter of 3 for the lexemes in slot1. Conversely, for slot2, 5,000 iterations were performed with a perplexity parameter of 4.
[3] The Euclidean method was used to calculate distances, and the Ward.D2 method was utilized as the clustering method for the hierarchical clustering analysis.

depicts the result of the hierarchical clustering of the significantly attracted lexemes in $SLOT_1$. The average silhouette width is highest (0.51) with five clusters, represented by P_1 through P_7. The *p*-value of the collostruction strength is displayed using font color, with a distinction made for whether the lexeme appears only once in $SLOT_1$ of BA imperative conditional.

The clusters shown in Figure 1 confirm that each cluster represents a specific semantic meaning. For example, in the case of P_5, both *sumu* and *owaru* show the meaning of the completion of an event. This cluster is distinct from the other clusters. P_4 consists of two lexemes, *hoshii* and *tai*, which typically express a person's desire. *Yoi* and *yoroshii* in P_3 both contain the meaning of a positive evaluation. The meaning of existence is observed in P_1: *Irassharu* is an honorific for a person's existence, *oru* expresses the existence of an animate being, and *aru* expresses the existence of an inanimate being. P_2 contains two lexemes, *nai* and its distinct notation, namely, 無い and ない. Although distinct in notation, their collocational distribution is similar to each other, as judged by their proximity in the dendrogram. They both express the meaning of non-existence, which is opposite in meaning to P_1. P_2 also contains two other lexemes, *wakaru* and *dekiru*, which do not share a common meaning with *nai*, and it may not be intuitive why they are in the same cluster. This is probably because a word2vec model is built from the collocational information, and *wakaru* and *dekiru* frequently co-occur with *nai*, enough for them to be placed in the same cluster. *Wakaru* and *dekiru* are semantically related to each other in that they both express an ability. Therefore, semantic features of P_2 are summarized as non-existence and ability.

Of the five identified clusters, it is suggested that the most salient cluster is P_1, as all the lexemes in $SLOT_1$ have a *p*-value lower than 0.00001. This indicates that BA imperative conditional favors the meaning of existence as the meaning of its protasis. Among the three lexemes with the meaning of existence, *aru* exhibits the highest collostructional strength. The use of *aru* in $SLOT_1$ at least has three ways of relating to its subject as demonstrated in the following examples:

(4) a. Nani-ka adobaisu-ga are-ba oshie-te-kudasai.
what-INT advice-NOM exist-CLM teach-CLM-give.IMP
'If you have some advice, please tell me.' (BCCWJ OC04_01128)

b. Moshi aru-no-de are-ba oshie-te-kudasai.
if exist-NMLZ-COP exist-CLM teach-CLM-give.IMP
'If it is the case that it exists, please tell me.' (BCCWJ OC02_03329)

c. Moshigozonji-de are-ba oshie-te-kudasai.
if know.HON-COP exist-CLM teach-CLM-give.IMP
'If it is the case that you know it, please tell me.' (BCCWJ OC02_05439)

In (4a), *aru* is used to express the hypothetical situation where certain advice exists. In this case, the subject of the lexeme corresponds to a thing. Secondly, *aru* refers to the existence of a situation in (4b). Finally, when the subject of *aru* is the hearer, it expresses the existence of a situation where the hearer is involved. The use of *aru* in (4a) accounts for 853 cases (93.22%), while the use of situation in (4b) accounts for 34 cases (3.72%), and the use of hearer in (4c) accounts for 28 cases (3.06%). These results suggest that the most typical meaning expressed in P_1 of BA imperative conditional is to express a hypothetical situation where a thing exists.

The lexemes in $SLOT_2$ with a frequency greater than one, which were attracted to BA imperative conditional, were optimally clustered into five clusters with an average silhouette width of 0.43. The results of the hierarchical clustering are presented in Figure 2, with each cluster labeled A_1 through A_5. Notably, cluster A_4, is the most significant as all the lexemes in this cluster are significantly attracted to BA imperative conditional with a *p*-value lower than 0.001. Additionally, each lexeme in this cluster expresses communication-related meanings. A_2, on the other hand, exhibits semantic

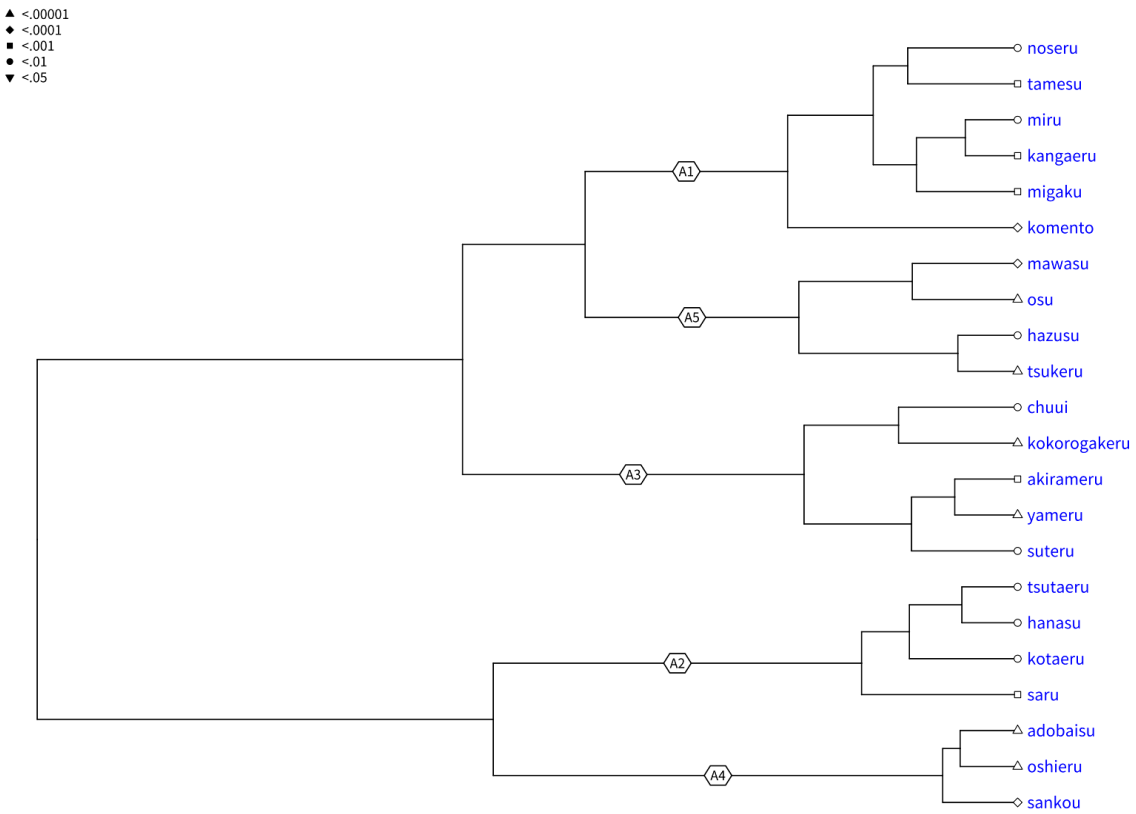


Figure 2. Lexemes in $SLOT_2$ of BA imperative conditional

similarity to A_4, as it comprises verbs of speech, except for *saru* (leave). It is suggested that the inclusion of *saru* in A_2 is due to its co-occurrence with the actions represented by the verbs in this cluster, which affects the underlying structure of the word2vec model.A_1 comprises lexemes that are related to cognitive behavior leading to specific outcomes. For example, the verb *kangaeru* expresses

the act of thinking, which can lead to the creation of an idea. Similarly, *tamesu* expresses the act of trying, which can result in the action of a trial. The verb *miru* is often used to convey the meaning of trying and seeing, as in English. *Migaku* (polishing) may not be intuitively associated with the aforementioned lexemes. However, it is frequently used to denote the meaning of improving something, such as one's skills or art of work. Consequently, the inclusion of *komento* (comment) in this cluster can be explained by considering it as a verbal output of the actions denoted by these verbs.

Cluster A_5 comprises verbs that express the manipulation of an object. Specifically, the verbs *hazusu* and *tsukeru* are associated with detaching and attaching, while *mawasu* and *osu* are related to the exercise of force onto an object.

Cluster A_3, on the other hand, relates to the direction of one's attention towards an object. The verb *chuui* (attention) and *kokorogakeru* (to note) are both convey the act of directing one's attention to an object or behavior. In contrast, the verbs *akirameru* (to give up) and *yameru* (to quit) denote the cancellation of the direction towards a particular action. The act of abandoning expressed by *suteru* is also related to the latter meaning. As we have seen, simple collostruction analysis has revealed semantically salient clusters based on word2vec model.

The covarying collostruction analysis revealed 19 types of combinations of lexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ with a frequency greater than one. The significantly attracted combination of lexemes and their respective cluster numbers are presented in Table 1where the columns $SLOT_1$ and $SLOT_2$ cluster represent the clusters identified in the simple collostruction analysis.

$SLOT_1$	$SLOT_2$	$SLOT_1$ cluster	$SLOT_2$ cluster	collostruction strength
aru	*oshieru*	P_1	A_4	81.46
nai	*saru*	P_2	A_2	32.15
nai	*yameru*	P_2	A_3	24.58
yoroshii	*komento*	P_3	A_1	12.71
yoi	*sankou*	P_3	A_4	12.1
nai	*hazusu*	P_2	A_5	12.1
nai	*suteru*	P_2	A_3	12.1
nai	*migaku*	P_2	A_1	12.1
nai	*akirameru*	P_2	A_3	12.1
nai	*tsutaeru*	P_2	A_2	11.74
nai	*kokorogakeru*	P_2	A_3	10.41
nai	*hanasu*	P_2	A_2	10.05
nai	*osu*	P_2	A_5	8.91
dekiru	*mawasu*	P_2	A_5	8.6
nai	*tsukeru*	P_2	A_5	8.39
nai	*kangaeru*	P_2	A_1	6.6
nai	*kangaeru*	P_2	A_1	6.26
nai	*miru*	P_2	A_1	6.26
irassharu	*oshieru*	P_1	A_4	4.12

Table 1. Covarying collexemes of $SLOT_1$ and $SLOT_2$ of BA imperative conditional.

The result of the covarying collexeme shows that the significantly attracted patterns of BA imperative conditional are categorized into specific semantic relations. Among these patterns, the most salient ones include the lexemes *aru* in SLOT_1 and *oshieru* in SLOT_2. An instance of these lexemes in their respective slots can be seen in the following sentence (5):

(5) Yoi renshuu houhou -ga are-ba oshie-te-kudasai.
good practice method-NOM exist-CLM teach-TE-give.IMP
'If there is a good method for practice, please teach me.' (BCCWJ OC01_01864)

The observed pattern highlights the salient semantic relation between the existence of a situation in the protasis and the request for offering information in BA imperative conditional. This semantic relation is further supported by the occurrence of *irassharu* in the same cluster as *aru* (P_1) and *oshieru* as a significant pattern.

The aforementioned semantic relation is also observed with other lexemes that have similar semantic content. As previously demonstrated, the lexemes in A_1 are semantically linked to those in A_2 in terms of the transmission of information. This observation can be extended to P_1 and P_2, which have opposite meanings of existence and non-existence, respectively. The examples provided in (6ab) exemplify this pattern with the request for transmitting information in its apodosis using lexemes in A_2.

(6) a. Kare-ga kii-te-i-nakere-ba kou tsutae-te-kudasai.
3SG-NOM listen-CLM-exist-NEG-CLM this tell-TE-give.IMP
'If he is not listening, please say this to him.' (BCCWJ LBo9_00200)

b. Moshi sashitsukae nakere-ba hanashi-te-kudasai.
if obstacle exist.NEG-CLM tell-TE-give.IMP
'If it doesn't bother you, please tell me.' (BCCWJ OB1X_00087)

In sentences (6ab), the covarying pattern with the most frequent lexeme in SLOT_1 is *nai*, which appears in 14 out of 19 covarying combination types in P_2. This lexeme co-occurs with communication verbs such as *tsutaeru* and *hanasu* in A_2, similar to those in A_4 that contain *oshieru*. This semantic similarity between the protasis and apodosis suggests that the combination of lexemes in P_1 and P_4, and those in P_2 and A_2, are in close semantic proximity. These instances confirm that the pattern of hypothesizing the state of affairs where a particular entity does not exist in the protasis and the order of offering information in the apodosis is favored in BA imperative conditional.

Another salient pattern in BA imperative conditional is when a speaker orders their interlocutor to direct or divert their attention to or from a certain action by suggesting them to think or forget

about it. This pattern is expressed through the combination of lexemes $SLOT_1$ and A_1 or A_3, which may include *kangaeru*, *miru*, *kokorogakeru* and *akirameru*. In such cases, the non-occurrence of an event is expressed using the negative particle *nai*. Another semantic relation observed with *nai* in $SLOT_1$ of BA imperative conditional is when it pertains to performing a manipulation, which is represented by the lexemes in A_5.

The last salient pattern in BA imperative conditional is hypothesizing the hearer's ability or the convenience of the speaker to perform the action requested in the apodosis. When the speaker hypothesizes the hearer's ability in the protasis, the lexeme *dekiru* is typically used. On the other hand, the lexeme *yoi* (good) occupies $SLOT_1$ to hypothesize the convenience of the hearer. In such cases, the prominent lexemes in A_4 and A_1 are *sankou* and *komento,* respectively. Although they belong to different clusters, they share a common trait in that they are related to the interaction of information.

4. Discussion and Conclusion

The current study has investigated the semantic properties of BA imperative conditional focusing on the lexemes in $SLOT_1$ and $SLOT_2$ of BA imperative conditional and their combinatory patterns. The result has shown that particular lexemes are significantly attracted to the conditional under study. It has been shown that some lexemes are salient in the protasis, and others are in the apodosis. In other cases, particular combinations of the lexemes are salient in each slot.

The study identified salient patterns of BA imperative conditionals that suggest a multi-level construction network. According to Hilpert (2019: 21), one way to determine if a pattern is an instance of a construction is to look for frequent collocational patterns. This study found that the attracted lexemes and their combinatory patterns identified with two types of collostruction analysis, indicating that it can be considered a construction. The findings suggest that the existence of specific sub-constructions of BA imperative conditionals, which vary in specificity and are connected with semantic similarities between each construction. The specificity of a construction is lower when a single slot is filled with a lexeme than when both slots are occupied with specific lexemes. Therefore, this information can be obtained from the results of simple and covarying collostruction analysis, respectively. Figure 3 partially diagrams the constructions identified in this study.

The construction network diagrammed in Figure 3 illustrates the vertical relation between each node to show the degree of specificity of the construction. The uppermost node represents the most general level of BA imperative conditional, while the lower nodes represent increasingly specific subconstructions. The protasis is colored in red and expresses the meaning of *condition(cond.)*, while the apodosis is boxed in blue and expresses the meaning of *order or request (o/r)*.

At the lowest node, we find the most specific subconstruction of BA imperative construction, which is identified by two slots in the protasis and apodosis filled with two lexemes, *are* and *oshiete*, as identified by covarying collexeme analysis. Above this level, the constructions identified with

simple collostruction analysis have SLOT$_1$ or SLOT$_2$ filled with a specific lexeme. For example, the nodes with *are* and *irasshare* in SLOT$_1$ represent a subconstruction of BA imperative conditional.

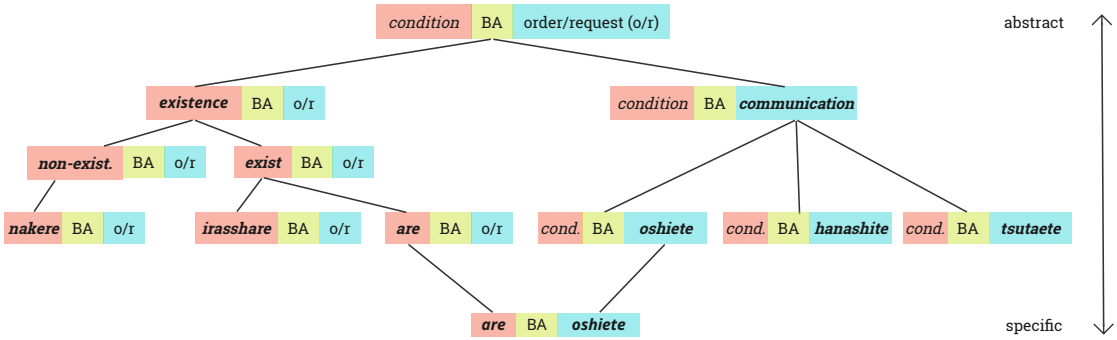


Figure 3. Partial construction network of BA imperative conditional.

The connections between nodes indicate the semantic schematization of the lower constructions. For instance, the pattern of '*exist* BA order/request' schematizes the lexemes in SLOT$_1$ of '*irasshare/are* BA order/request.' Also, the construction at a more abstract level, '*existence* BA order/request' abstracts '*non-exist* BA order/request' and '*exist* BA order/request.' These correspond to the semantic clusters identified through the hierarchical clustering of the lexemes in SLOT$_1$ and SLOT$_2$ based on the word2vec model.

The identified salient clusters of lexemes in SLOT$_1$ in the protasis are categorized into four semantic groups: existence (P$_1$ and part of P$_2$), desirability (P$_3$ and P$_4$), possibility (part of P$_2$), and completion (P$_5$). The first three semantic group are related to each other in that they all represent the state, while the fourth group refers to the non-state. As Figure 1 illustrates, the lexemes in this group are displaced from the other groups, and it confirms this semantic distinctness. Meanwhile, the lexemes in SLOT$_2$ are classified into five types, namely, analysis (A$_1$), manipulation (A$_5$), attention (A$_3$), and communication (A$_2$ and A$_4$). The last cluster is also distinct from the other clusters, and it shows the conceptual distinctness of the cluster. Figure 2 depicts that the last semantic group is distant from the other groups. This can be accounted for by the degree of intersubjectivity. In the last semantic group, the events that the verbs typically represent require at least two people in the usage event, the speaker and the hearer. Conversely, the other groups do not require interlocutors. Hierarchical clustering successfully captures the conceptual distinctness in the lexemes in SLOT$_1$ and SLOT$_2$.

The results of this study demonstrate the effectiveness of utilizing word2vec modeling, hierarchical clustering, and collostruction analysis to identify significant semantic aspects of BA imperative conditional, with a particular emphasis on the lexemes in SLOT$_1$ and SLOT$_2$. Despite the success of this approach, certain issues must be considered. Notably, the hierarchical clustering method based on tSNE outcomes may not consistently produce semantically intuitive clusters. For example, P$_1$

comprises lexemes conveying the idea of existence, yet *nai*, which is semantically linked to this sense, is assigned to P_2. In such instances, it is essential to scrutinize the interpretation of the clustering. Despite these potential difficulties, the overall findings of this study are promising and can be extended to future investigations exploring other conditional types.

References

Flach, Susanne (2021) Collostructions: An R Implementation for the Family of Collostructional Methods. R. www.sfla.ch.

Hilpert, Martin (2019) *Construction Grammar And Its Application To English*. 2nd ed, Cheshire: Edinburgh University Press.

Krijthe, Jesse, and Laurens Van der Maaten (2022) Rtsne: T-Distributed Stochastic Neighbor Embedding Using a Barnes-Hut Implementation. R.

Manabe Youshun, Oka Teruaki, Umikawa Hiroki, Takaoka Kazuma, and Asahara Masayuki (2019) Fukusuu ryuudo-no bunkatsu kekka-ni motozuku nihongo tango bunsan hyougen. *Proceedings of the Twenty-fifth Annual Meeting of the Association for Natural Language Processing*, 1407–10.

Masuoka Takashi (1993) Nihongo-no joukenhyougen-ni tsuite. In Masuoka Takashi (eds.) *Nihongo-no joukenhyougen*, 1–20, Tokyo: Kurosio Publishers.

Matsuda, Hiroshi, Mai Oomura, and Masayuki Asahara (2019) Tan Tan'i Hinshi-No Youhou Aimaisei Kaiketsu-to Izon Kankei Raberingu-No Douji Gakushuu. *Proceedings of the Twenty-Fifth Annual Meeting of the Association for Natural Language Processing*, 201–4.

Mikolov, Tomas, Wen-tau Yih, and Geoffrey Zweig (2013) Linguistic Regularities in Continuous Space Word Representations. *Proceedings of the 2013 Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies*, 746–51, Atlanta, Georgia: Association for Computational Linguistics. https://aclanthology.org/N13-1090.

National Institute for Japanese Language and Linguistics (1964) *Gendai Zasshi Kyuujusshu No Yougo Youji: Dai 3 Bunsatsu (Bunseki)*. NINJAL report, Shuuei Shuppan.

Stefanowitsch, Anatol, and Stefan Th. Gries (2003) Collostructions: Investigating the Interaction of Words and Constructions. *International Journal of Corpus Linguistics* 8(2): 209–43. https://doi.org/10.1075/ijcl.8.2.03ste.

——— (2005) Covarying Collexemes. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* 1(1): 1–43. https://doi.org/10.1515/cllt.2005.1.1.1.

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (2015) Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese., Tokyo.

Number Disagreement in *There* Sentences with Existence Verbs*

MINO Takashi

1. Introduction

Number disagreement between the verb and the postverbal noun in *there* constructions (TCs) has sometimes been observed, especially in a colloquial register, as in (1).

(1) a. Well, *there is* **children** that are going to trick-or-treating, I'm sure. (COCA: SPOK)
b. *There was* **reports** that this was in fact not spontaneous. (COCA: SPOK)
c. *There's* **problems** in a regulatory process. (COCA: SPOK)[1]

Meechan and Foley (1994: 76) showed that such number disagreement is more widespread than many previous analyses would lead us to believe, and Svartvik and Leech (2016: 200) claimed that *there's* with plural postverbal nouns is no longer unacceptable. Many studies have focused on number disagreement in TCs with *be*-verbs and concluded that number disagreement is caused by grammatical factors (e.g., tense, person, and polarity), processing factors (e.g., word length and the gap between the verbs and postverbal nouns), and socio-geographic factors (e.g., age, birthplace, and education).

By contrast, it has been reported that the postverbal noun should always agree with the non-*be* verb in TCs (e.g., Fisher (1985) and Martínez Insua and Palacios Martinez (2003)). However, there are some examples of number disagreement in the corpora, as shown in (2).

(2) a. Similarly, in this country, I think, *there exists* **certain Americans** who harbor resentment or regard Japan even as a threat to this country. (COCA: SPOK)
b. But on the other hand, *there remains* **plotters** out there. (COCA: SPOK)
c. In every person, *there lives* **two possible selves**: (TV: 2007)

Bauer (2022: 127) stated the following: "Perhaps because of this spoken-language construction, we do find examples with *there is* or *there are* that breaks the basic rule of agreement. We also find *here is*/*here are*, *where is*/*where are*, <u>*there exists*/*there exist*</u> and other variants [underline mine]," which suggests that number disagreement can also occur in TCs with the verb *exist*. Therefore, this study investigates the number disagreement in TCs with existence verbs such as *exist* and *remain*.

The remainder of this article is organized as follows. Sections 2 and 3 summarize previous studies on number disagreement in TCs with *be*-verbs and non-*be* verbs, respectively. Section 4 discusses the behavior of TCs with existence verbs based on corpus research. Section 5 concludes the paper.

* This work was funded by JSPS KAKENHI Grant Number 21K20003.
[1] All emphasis is mine.

2. Number Disagreement in TCs with *Be*-verbs

Many previous studies have examined the number disagreement in TCs with *be*-verbs (e.g., Meechan and Foley (1994) and Hay and Schreier (2004)). This section reviews three studies: Al-Shawashreh and Al-Omari (2019), Martínez Insua and Palacios Martinez (2003), and Yaguchi (2017), which conducted quantitative surveys based on four large corpora: *the British National Corpus* (BNC), *the Corpus of Contemporary American English* (COCA), and *the Santa Barbara Corpus of Spoken American English* (SBCSAE), and *the Wordbanks* (WB).[2] Smallwood (1997) claimed that the ratio of non-standard agreement is higher in informal speech data than that in formal and semiformal speech data. Because these corpora include not only informal speech but also formal or semiformal speech, it is expected that the TC disagreement ratios would be lower than the ratios reported by sociolinguistic studies that only used informal speech datasets (e.g., 71% (167/235) in Meechan and Foley (1994), 62% (193/310) in Tagliamonte (1998), and 58% (599/1028) in Hay and Schreier (2004)).[3]

Al-Shawashreh and Al-Omari (2019: 667) extracted data from COCA by "typing the word *there* in the word(s) space, choosing *nounpl.* in the *pos* (part of speech), and highlighting *SPOK* and *2011* from the drop list." After manually excluding the out-of-scope usages, 375 tokens were obtained, as shown in Table 1. They found that 38% of the tokens (143 out of 375) had number disagreement between the nouns and verbs.

Variants	%	No.
Singular (is, 's, was)	38	143
Plural (are, 're, were)	62	232
N	100	375

Table 1. Number disagreement ratios in COCA (SPOK in 2011);
adapted from Al-Shawashreh and Al-Omari (2019: 669)

Martínez Insua and Palacios Martinez (2003: 266) investigated TCs by the BNC one-million-word spoken and written English corpus. In their study, "the texts selected are drawn from the years 1989 onwards, and equal proportions of words were taken from both speech and writing." The results are presented in Table 2. Unlike Al-Shawashreh and Al-Omari (2019), no distinction between singular verbs (*'s*, *is*, *was*) and plural verbs (*are*, *were*) was made in Table 2.

[2] Many previous studies built original corpora or used genre-specific corpora to reveal sociological factors triggering number disagreement. However, this study introduced previous studies that used large and balanced corpora such as COCA and BNC because this study made use of these corpora as well.
[3] Consult these studies for detailed research methods and targeted expressions.

	TCs showing concord		*TCs showing non-concord*	
	No.	%	No.	%
Written English	932	96.78	31	3.22
Spoken English	1255	86.74	192	13.26
Total	2187	90.75	223	9.25

Table 2. Number disagreement ratios in BNC;
adapted from Martínez Insua and Palacios Martinez (2003: 268)

In their study, the number disagreement ratio in the spoken sample was 13. 26%. The non-concord ratio was low compared to Meechan and Foley (1994), Tagliamonte (1998), and Hay and Schreier (2004). Hence, Martínez Insua and Palacios Martinez (2003: 269) claimed "13. 25% (sic) is an important percentage, but it could not be claimed to constitute the majority."

Yaguchi (2017) examined the number disagreement using four corpora (BNC, COCA, SBCSAE, and WB) with a special focus on verbal forms; the results are shown in Table 3.

	BNC Spoken	COCA Spoken	UKspoken[4]	SBCSAE
there's	14.1	12.7	21.3	24.5
there is	4.0	2.7	3.4	5.6
there are	0.9	0.2	1.0	0
there was	15.8	5.4	12.5	15.9
there were	0.8	0.4	3.0	0

Table 3. Number disagreement ratios in BNC Spoken, COCA Spoken, UKspoken, SBCSAE;
adapted from Yaguchi (2017: 184) (accessed in March, 2012)

As mentioned by many studies, the disagreement ratios of *there's* are the highest of all variants, except in the case of BNC Spoken. They range from 12.7% in COCA Spoken to 24.5% in SBCSAE. This result showed that *there's* has acquired the status of a fixed presentative formula for both singular and plural postverbal nouns (Breivik and Martínez Insua (2008)).

To summarize, while number disagreement has been observed in TCs with *be*-verbs, the ratio is relatively low in large corpora including both formal and informal samples such as COCA and BNC compared to 71% (167/235) in Meechan and Foley (1994), 62% (193/310) in Tagliamonte (1998), and 58% (599/1028) in Hay and Schreier (2004).

3. Number Disagreement in TCs with Non-*be* Verbs

[4] UKspoken is a subcorpus of WB.

Many previous studies have claimed that postverbal nouns must agree with the verbs in TCs that have non-*be* verbs, as in (3) and (4):

(3) a. So say *there're/'s* **two problems**. (Deal 2009: 310)

b. So say *there arise/*arises* **two problems**. (ibid.)

(4) a. *There exist/*exists* **no good solutions** to this problem. (McCloskey 1991: 563)

b. At the old Winthorpe mansion, *there hang/*hangs* over the fireplace **two portraits of the man** who founded this great company. (Schütze 1999: 479)

Martínez Insua and Palacios Martinez (2003: 272) commented on the number disagreement acceptability of TCs with non-*be* verbs: "[S]ince their already particular nature (the fact that *there* is not frequently combined with a verb other than *be*) the speaker/writer would use these structures with more concern about the norms, and would pay special attention to the concord between the verbal form and the PVNP [postverbal noun phrase]." No TCs with non-*be* verbs showed number disagreement in Martínez Insua and Palacios Martinez's (2003) samples, though, in the first place, only eight TCs with non-*be* verbs were found in their datasets.

However, a few studies have acknowledged the number disagreement between non-*be* verbs and postverbal nouns in TCs. For example, Gazdar and Pullum (1980: 199) provided example (5), in which the verb *sits* occurs with the coordinated noun phrases *a large purple gorilla and a small pink baboon*. Bauer (2022: 127) also hinted that there were TCs with non-*be* verbs that showed number disagreement, which was confirmed when large corpora such as COCA and *the TV corpus* (TV) were consulted, as shown in (2) and repeated here as (6).

(5) Near the fountain *there sits* **a large purple gorilla and a small pink baboon**.
(Gazdar and Pullum 1980: 199)

(6) a. Similarly, in this country, I think, *there exists* **certain Americans** who harbor resentment or regard Japan even as a threat to this country. (COCA: SPOK)

b. But on the other hand, *there remains* **plotters** out there. (COCA: SPOK)

c. In every person, *there lives* **two possible selves**: (TV: 2007)

Therefore, it appears that number disagreement is not always unacceptable in TCs with non-*be* verbs.[5]

[5] Based on a corpus study with BNC, Olofsson (2007, 2011) claimed that number disagreement was observed in TCs with catenative verbs such as *appear* and *seem*, as in (i) and (ii). Quirk et al. (1985) also provided TC examples with the catenative verb *happen* that lacked number agreement, as in (iii):

(i) As *there seems to be* **no questions** Ma'am, may I propose the adoption of the report. (BNC)

(ii) *There appears to be* **substantial numbers of people** who join or leave, become active or inactive, over time. (BNC)

(iii) *There happens to be* **only two apples** left. (Quirk et al. 1985: 1406)

4. Corpus Study

This section investigated the number disagreement ratios in TCs with existence verbs. Because of the rarity of such examples, this study used seven corpora to collect examples: *the British National Corpus* (BNC), *the Corpus of Canadian English* (Strathy) (CAN), *the Corpus of Contemporary American English* (COCA), *the Movie Corpus* (MOV), *the Corpus of American Soap Operas* (SOAP), *the TV Corpus* (TV), and *the Wordbanks Corpus* (WB).[6] Because number disagreement tends to be observed in spoken genres, only spoken samples were collected from these seven corpora. When using genre-balanced corpora (i.e., BNC, CAN, COCA, and WB), only the spoken sub-corpora were consulted. In addition, only singular verb plus plural noun combinations were focused on because almost all TC concord variability has been found to occur with singular verbs and plural noun phrases. Note that many sentences cited below are maybe or probably judged as prescriptively unacceptable but they are given to show the actual usage of TCs with non-*be* verbs.

4.1. Number Disagreement in TCs with *Exists*

First, the number disagreement in TCs with *exists* was examined. The verb *exist* was chosen as the first case study because Bauer (2022: 127) suggests the existence of examples showing number disagreement. Also, Yaguchi (2017) showed that TCs with the genuine existence verb *exist* behave in more similar ways to TCs with the *be*-verb than those with other non-*be* verbs do. Therefore, it was predicted that the disagreement rate would be higher than those with other verbs. Sentences in Mark Davies's corpora were collected using the two strings *there exists* and *there ADV exists* and sentences in WB were collected using the two strings *there exists* and *there ~P(AV0) exists*. This study does not distinguish existential from deictic *there* constructions as the boundary between the two is difficult to clarify.

Table 4 summarized the number disagreement's raw frequencies and percentages. Examples are shown in (7). COCA (sp) and COCA (t/m) show COCA (spoken) and COCA (TV/MOVIES), respectively.

exists	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	29	28	3	12	55	53	2	6	188
Tokens with disagreement	6	3	0	0	5	8	0	2	24
Percentage (%)	20.69	10.71	0	0	9.09	15.09	0	33.33	12.77

Table 4. Number disagreement's frequencies in TCs with *exists*

[6] Because COCA shares some samples with TV and MOV, the same examples occur in both of them.

(7) a. Similarly, in this country, I think, *there exists* **certain Americans** who harbor resentment or regard Japan even as a threat to this country. (COCA: SPOK)

b. *There already exists* **specific mandatory guidelines** - rules -- for meat, for milk, for seafood. (COCA: SPOK)

c. *There exists* in this world **some things** too valuable to belong to any one person. (TV: 2004)

d. It is recognized that *there exists* **high financial costs and significant challenges** in providing quality telephone service to all residents of the NWT… (CAN)

In total, 188 examples of TCs with *exists* were found across the seven corpora, with approximately 13% (24 out of 188 tokens) showing number disagreement. Surprisingly, the number disagreement ratio in COCA (spoken) is over 20%. Though the token frequencies were low in Table 4, it is noteworthy that the results were similar to the results of TCs with the *be*-verb in Martínez Insua and Palacios Martinez (2003) and Yaguchi (2017).

4.2. Number Disagreement in TCs with Other Existence Verbs

TCs with six types of existence verbs; *hang*, *lie*, *live*, *remain*, *sit*, and *stand*; were then examined. TCs in Mark Davies's corpora were collected using the two strings *there hangs*/*lies*/*lives*/*remains*/*sits*/*stands* and *there ADV hangs*/*lies*/*lives*/*remains*/*sits*/*stands* and sentences in WB were collected using the two strings *there hangs*/*lies*/*lives*/*remains*/*sits*/*stands* and *there ~P(AV0) hangs*/*lies*/*lives*/*remains*/*sits*/*stands*, the results from which are presented in Tables 5 to 10.

First, only five TCs with the verb *hangs* were found in the spoken corpora, none of which showed number disagreement.

hangs	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	1	0	0	0	1	3	0	0	5
Tokens with disagreement	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Percentage (%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0

Table 5. Number disagreement's frequencies in TCs with *hangs*

Second, the spoken corpora interrogation found 209 TCs with *lies*, 7.18 % of which (15 out of 209 tokens) showed number disagreement. A few examples are given in (8).

lies	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	11	37	1	5	69	82	4	0	209
Tokens with disagreement	2	3	0	0	5	5	0	0	15
Percentage (%)	18.18	8.11	0	0	7.25	6.10	0	0	7.18

Table 6. Number disagreement's frequencies in TCs with *lies*

(8) a. You see, in Joseph Newman's garage, *there lies* **the unlikely results of 18 years of research and frustration**. (COCA: MOV)

b. *There lies* **some old, wild magiks**. (TV: 2013)

Third, the spoken corpora interrogation found 50 TCs with *lives*, 8.00 % of which (4 out of 50 tokens) showed number disagreement. A few examples are given in (9).

lives	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	3	8	0	0	17	21	1	0	50
Tokens with disagreement	0	0	0	0	2	2	0	0	4
Percentage (%)	0	0	0	0	11.76	9.52	0	0	8.00

Table 7. Number disagreement's frequencies in TCs with *lives*

(9) a. *There lives* **but three good men** unhanged in England. (TV: 1985)

b. In every actor *there lives* **a tiger, a pig, an ass and a nightingale**. (MOV: 2006)

Fourth, the spoken corpora interrogation found 222 TCs with *remains*, 9.46 % of which (21 out of 222 tokens) showed number disagreement. A few examples are given in (10).

remains	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	63	19	3	18	65	43	3	8	222
Tokens with disagreement	11	1	0	2	4	3	0	0	21
Percentage (%)	17.46	5.26	0	11.11	6.15	6.98	0	0	9.46

Table 8. Number disagreement's frequencies in TCs with *remains*

(10) a. Well, on Keystone as you know, *there still remains* **a couple of steps** to what the

President has said all along is let's go through the regular order, let's go through the regular process. (COCA: SPOK)

b. Still, General Ricardo Sanchez said *there remains* **some 5,000 Iraqi guerrillas** out there opposing the U.S. forces. (COCA: SPOK)

Fifth, the spoken corpora interrogation found 41 *there* sentences with *sits*, 7.32 % of which (3 out of 41 tokens) showed number disagreement. A few examples are given in (11).

sits	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	2	4	0	0	17	18	0	0	41
Tokens with disagreement	0	1	0	0	0	2	0	0	3
Percentage (%)	0	25	0	0	0	11.11	0	0	7.32

Table 9. Number disagreement's frequencies in TCs with *sits*

(11) a. And then, in a very subdued imitation of the female whooping crane, she dance-walks over to a large nest where *there sits*... **a can of Yoni Yum and a can of Dew**! (COCA: MOV)

b. *There sits* **my very life and about $ 10 million**. (MOV: 1945)

Sixth, the spoken corpora interrogation found 80 TCs with *stands*, 5.00 % of which (4 out of 80 tokens) showed number disagreement. A few examples are given in (12).

stands	COCA (sp)	COCA (t/m)	BNC	WB	TV	MOV	SOAP	CAN	Total
Tokens	3	13	0	0	28	36	0	0	80
Tokens with disagreement	1	0	0	0	2	1	0	0	4
Percentage (%)	33.3	0	0	0	7.14	2.78	0	0	5.00

Table 10. Number disagreement's frequencies in TCs with *stands*

(12) a. *There stands* **the two best things** I ever did. (TV: 2013)

b. *There stands* **all that hope rising up to infinity and all the beauty all that love and hope and surcease**! (MOV: 1969)

In summary, while TCs with existence verbs that showed number disagreement were found, the

non-concord ratios were all extremely low under 10%. Although the frequencies were so low that it was not possible to make statistical generalizations, it is noteworthy that the disagreement ratio for *exist* is slightly higher than those for the other existence verbs, *hang*, *lie*, *live*, *remain*, *sit*, and *stand*.

5. Conclusion

Previous studies (e.g., Fisher (1985) and Martínez Insua and Palacios Martinez (2003)) have stated that the postverbal noun must agree with the non-*be* verb in TCs. However, the examination of the seven corpora used in this study found that of the 188 examples of TCs with *exists,* approximately 13% of them (24 out of 188 tokens) showed number disagreement. While the token frequencies were low, it is noteworthy that these results were similar to the results of TCs with *be*-verbs in Martínez Insua and Palacios Martinez (2003) and Yaguchi (2017), which appears to indicate that number disagreement in TCs with non-*be* verbs, especially *exist*, is observed to some extent.

References

Al-Shawashreh, Ekab Y. and Mohammad A. Al-Omari (2019) Subject-verb agreement in existential constructions in contemporary American English: A corpus-based study. *The Arab Journal for Arts* 16: 661-680.

Bauer, Laurie (2022) There's heaps of money to be won: Number agreement. In Claude, Andreea S. and Laurie Bauer (eds.) *Mysteries of English grammar: A guide to complexities of the English language*, 122-131, London/New York: Routledge.

Breivik, Leiv E. and Ana E. Martínez Insua (2008) Grammaticalization, subjectification and non-concord in English existential sentences. *English Studies* 89: 351-362.

Deal, Amy R. (2009) The origin and context of expletives: Evidence from "selection." *Syntax* 12: 285-323.

Fisher, Ulla Thagg (1985) *The sweet sound of concord*: *A study of Swedish learners' concord problems in English*. Lund: Liber.

Gazdar, Gerald and Geoffrey K. Pullum (1980) *There* is there. *York Papers in Linguistics* 8: 199-200.

Hay, Jennifer and Daniel Schreier (2004) Reversing the trajectory of language change: Subject-verb agreement with *be* in New Zealand English. *Language Variation and Change* 16: 209-235.

Martínez Insua, Ana E. and Ignacio M. Palacios Martinez (2003) A corpus-based approach to non-concord in present day English existential *there*-constructions. *English Studies* 84: 262-283.

McCloskey, James (1991) *There*, *it*, and agreement. *Linguistic Inquiry* 22: 563-567.

Meechan, Marjory and Michele Foley (1994) On resolving disagreement: Linguistic theory and variation—*there's* bridges. *Language Variation and Change* 6: 63-85.

Olofsson, Arne (2007) Just how wrong is *there seems to be* + a plural noun phrase? Prescription vs. attested usage in the area of S-V concord. *Moderna Språk* 101: 2-8.

Olofsson, Arne (2011) Existential *there* and catenative concord. Evidence from the British National Corpus. *Nordic Journal of English Studies* 10: 29-47.

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. Harlow: Longman.

Schütze, Carson T. (1999) English expletive constructions are not infected. *Linguistic Inquiry* 30: 467-484.

Smallwood, Carolyn (1997) Dis-agreement in Canadian English existentials. *Proceedings of the 1997 Annual Conference of the Canadian Linguistic Association*: 227-238.

Svartvik, Jan and Leech Geoffrey (2016) *English: One tongue, many voices (2nd edition)*. New York: Palgrave Macmillan.

Tagliamonte, Sali (1998) Was/were variation across the generations: View from the city of York. *Language Variation and Change* 10: 153-192.

Yaguchi, Michiko (2017) *Existential sentences from the diachronic and synchronic perspectives: A descriptive approach*. Tokyo: Kaitakusha.

Data Sources

Davies, Mark (2004) *British National Corpus* (from Oxford University Press). Available online at https://www.english-corpora.org/bnc/ [last accessed 1 April 2023].

Davies, Mark (2008-) *The Corpus of Contemporary American English*. Available online at https://www.english-corpora.org/coca/ [last accessed 1 April 2023].

Davies, Mark (2011-) *Corpus of American Soap Operas*. Available online at https://www.english-corpora.org/soap/. [last accessed 1 April 2023].

Davies, Mark (2012-) *The Strathy Corpus of Canadian English* (from the Strathy Language Unit, Queen's University). Available online at https://www.english-corpora.org/can/ [last accessed 1 April 2023].

Davies, Mark (2019) *The Movie Corpus*. Available online at https://www.english-corpora.org/movies/ [last accessed 1 April 2023].

Davies, Mark (2019) *The TV Corpus*. Available online at https://www.english-corpora.org/tv/ [last accessed 1 April 2023].

WB：*The Wordbanks*. Available online at https://scnweb.japanknowledge.com/WBO2/ [last accessed 1 April 2023]

現代日本語の「X-ぶり／-っぷり」に関する意味分析*

小薬　哲哉

1. はじめに

本稿は、接尾辞「-ぶり／-っぷり」[1] がついた名詞表現（以下「X ぶり」[2]）について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）やウェブから収集した例を観察し、当該接尾辞が表す意味について考察する。「X ぶり」の前接要素 X には、以下のように、多様な品詞要素が生起することが知られている (杉岡 2005, Sugioka 2010, 杉村 2010 など)。

(1)　[名詞] 男っぷり、仕事ぶり、タフネスぶり、[動詞連用形]　飲みっぷり、[形容名詞（形容動詞）] 多才ぶり、[副詞] うっかりぶり　(BCCWJ[3])

本稿では、「-ぶり」の語形成における意味的な機能は何か、特に、多様な品詞が生起する「X ぶり」の意味をどのように捉えればよいかという点について、言語記述に重点を置きつつ考察を行う。考察にあたって、次の 2 点を特に検討する。第一に、名詞が前接する例（以下「N ぶり」）と動詞連用形の例（以下「V ぶり」）を観察し、その意味的特徴を考察する。第二に、類似した表現である「V 方」と比較することで、「V ぶり」の意味を考察する。「V ぶり」と「V 方」はどちらも「様子」といった類似した意味を表すとされている（例えば、杉岡 2005, Sugioka and Ito 2016）が、その意味的差異については、一部の研究を除いてあまり論じられてこなかった。本稿では、両表現の意味的差異も検討する。

以上の考察を通じて、本稿では、「（Y の）X ぶり」が、X から喚起される〈個体（モノ）〉〈事態（コト）〉を介したその副次的な意味概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表すことを主張する。本稿の構成は次のとおりである。2 節では「X ぶり」に関する先行研究を概観する。3 節で BCCWJ を利用した「X ぶり」の調査の概要を述べる。4 節で「N ぶり」についての考察と意味分析を行い、5 節で、「V 方」と比較しながら「V ぶり」の考察と意味分析を行う。最後に、6 節で結論を述べる。

---

*本研究は、日本語文法学会第 23 回大会（2022 年 12 月 17-18 日，オンライン開催）および Kansai Lexicon Project（KLP）（2023 年 2 月 12 日，オンライン開催）における発表原稿を加筆修正したものである。発表では多くの貴重なご指摘やコメントを頂戴した。ここに記して感謝申し上げる。なお、本研究は JSPS 科研費 22K00508 による研究成果の一部である。

[1] 国語辞書等の記述では、「-っぷり」という形式は口頭語に多く、「語調を強める」働きのあることがよく指摘される（/-ppuri/ のような「子音重複（gemination）」は強調の効果があることがよく知られる（多田 2023 も参照））。杉岡 (2005: 93, 注 9) や杉村 (2010) が指摘するように、両形式が共存する場合もある（例：話しぶり／話しっぷり）。

「-ぶり」と「-っぷり」に関して、母語話者の内省判断では一方の形式が容認されにくい場合がある。例えば、「食べっぷり」と「(?) 食べぶり」（Sugioka 2010: 153, fn. 16）は後者の方が容認しにくい（本稿 2.2 節の杉村 (2010) の分析も参照）。しかしながら、コーパス等で「食べぶり」が使われる実例は数多く観察される（BCCWJ では、「-ぶり」の方が「-っぷり」よりも用例数がかなり多い）。また、個人によっても表現の容認性に差が生じることがある。

「-ぶり」と「-っぷり」には、「語調を強める」という文体的効果以外にも何らかの差異が存在すると考えられるが、本稿ではこれを今後の検討課題とし、以下の議論ではこれ以上立ち入ることはしない。

[2] 以下では便宜上、特に言及がない限りは、「X ぶり」「X っぷり」の代表形として「X ぶり」を用いることにする。

[3] BCCWJ コーパスから抽出された例において、個人名が含まれる場合など、使用の適切性が懸念される場合には、議論や論証に支障のない範囲で、表現の一部に変更を加えている（変更を施した例には、上付きの † を付している）。

2. 先行研究

これまでの先行研究では、「-ぶり／-っぷり」や「-方」のような接尾辞が、動詞から「様態、様子」を表す名詞を派生する名詞化接辞として取り上げられてきた。特に「-方」による派生名詞は、文と同様の句構造を内包し、その構造的透明性の高さが注目されており、多くの研究者によってその生産性や規則性が考察されてきた（Sugioka 1992, 影山 1993, 伊藤・杉岡 2002, 杉岡 2005, Kishimoto 2006, Sugioka and Ito 2016 など）。一方、「X ぶり」を考察した論考は、管見の限り「V 方」ほど多くはなく、考察が及んでいない部分も多い（杉岡 2005, Sugioka 2010, 杉村 2010; 影山 1993 も参照）。以下では、「-ぶり／-っぷり」の代表的な研究として、杉岡 (2005) と杉村 (2010) を取り上げ、その分析と問題点を考察する。

2.1. 前接要素の条件と生産性

杉岡 (2005) では、前接要素に課される条件の観点から、「X ぶり」、特に動詞連用形が関わる「V ぶり」と「V 方」の比較を行っている。接辞付加のような語形成現象は、接辞が要求する要素によって、2 種類の語彙的指定が関与することが知られている（影山 1993）。一つは、「範疇の選択（category selection）」である。(1) で見たように、「X ぶり」の前接要素 X には多様な品詞の要素が現れうる。これに対して、「V 方」は動詞連用形のみが許される（例：「*歩行方」「*ダッシュ方」「*うっかり方」）。この点で、「X ぶり」の方が前接要素に関する範疇選択の条件が緩やかであり、「V 方」はその条件が厳しいと言うことができる。

接辞付加に関わるもう一つの語彙的指定が、「意味の選択（semantic selection）」に関するものである。杉岡 (2005: 86) は、「X ぶり」という派生名詞が「〇〇の様子」という共通した意味を持つと述べ、この意味に自然に適合できる語であれば、品詞を選ばずに名詞をつくることができるとしている。従って、「*知り｛ぶり／っぷり｝」「*始め｛ぶり／っぷり｝」など、「様子」と結びつかない意味を表す動詞には「-ぶり」がつきにくいと指摘する（同: 86-87）。これに対して、前接要素が動詞でありさえすれば、基本的には規則的に付加できると述べている（但し、状態動詞につきにくいという観察がある（影山 1993））。「V 方」の意味については、5.2 節で詳細に検討する）。

要するに、前接要素に対して、接辞「-ぶり」は意味選択に関する指定を受けるが、範疇選択に関しては指定がなく、そのことが当該接辞の生産性の要因となっているとされる。一方、「-方」は範疇選択に関してのみ指定を受け、意味選択に関しては指定がないことがその生産性の要因であると杉岡 (2005) は述べている。

範疇選択と意味選択という違いによって、語形成における両接辞の違いを明示的に描き出している点で、杉岡 (2005) の分析は注目に値する。しかし、「接辞が表す意味」という点に限ってみると検討の余地がある。特に、「X ぶり」の「〇〇の様子」という意味的規定では、以下のような例の解釈を説明することは難しい（いずれも BCCWJ から）。

(2) <u>枝ぶり</u>のよい木／<u>男ぶり</u>がよい

(3)　諸事都ぶりを尊ぶが武勇の誉れもたかく…／女っぷり高めのスパイシージュエリー

(2) の下線部は、あるモノの「形状、外見」という客観的特徴を表す点で共通するが、それらが指し示す具体的な内容は個々に異なっている。「枝ぶり」は「樹木としての枝の伸び具合や形状」を指しており、杉岡 (2005) の意味規定に合わせて言い換えれば、「枝としての様子」となるだろう。しかし、「男ぶり」は「男性としての容姿」だけでなく「気性」も含みうるもので、「男としての様子」という言い換えは、やや不自然に感じる。

また、(3)「都ぶり」は「都（として）の様子（＝形状・景観的特徴）」ではなく、「都を思わせる特徴、都らしさ」を表す。「女っぷり」も「女（として）の様子」ではなく、むしろ「女らしさ」に近い意味であり、かつ「高めの」という後続表現から、「女らしさ」に程度性が含意されていることも窺える。さらに、(3) のどちらの例も、「都そのもの」や「女そのもの」の「様子」について述べているのではなく、X に概念的に隣接する《対象》（「諸事」「スパイシージュエリー」）に対して「（程度性を伴う）X の特徴・X らしさ」という属性を主体的に付与している点も指摘できる。

「〇〇の様子」という杉岡 (2005) の意味規定は、「-ぶり」の意味規定として、多くの用例に当てはまめることができ、有用な言い換え表現と見なすことができる。しかし、当該表現の意味的特徴全てを説明するものではなく、より詳細な規定が必要であると考えられる。

2.2. 「X ぶり」「X っぷり」の形式的差異

杉村 (2010) では、インターネットの www ページをコーパスとして、「V ぶり」のデータを収集し、その意味について詳細に検討している。特に、「V ぶり」「V っぷり」という形式的違いが意味的違いに対応すると主張している。具体的には、生起する動詞の違いから、「V ぶり」は「当該事態の中身について内面的な質の様子を表す」のに対し、「V っぷり」は「当該事態の外面的な様相の現れが「豪快だ」「潔い」「見事だ」ということを表す」と述べている（同: 133）。例えば、(4a)「食べぶり」 では「動作主の食事作法がきれいであるという動作の中身の様子」を表すのに対し、(4b)「食べっぷり」は「動作主である岩隈投手の食べる姿が男らしく豪快であるという外面的な様相」を表すと述べている。

(4)　a.　私本当におそばが好きで最低でも年間 100 食は食べるんですがあんなにきれいな食べぶりをされる方は初めてでした。

　　b.　甘いマスクのイメージとは一転、自身初となる全国 CM で岩隈投手が見せる男らしく豪快な“食べっぷり”は、話題となりそうだ。

(杉村 2010: 132)

つまり、(4a) は「食べる」という事象を構成する一つ一つの動作（例 :「食べ物を口へ運ぶこと」など）の客観的性質を描写するのに対し、(4b) は事象を通した、主体に対する「豪快

さ」といった話者の主観的評価を表すという意味的な違いが存在すると指摘している。このように、杉村 (2010) は、「X ぶり」と「X っぷり」という形式的区別が、「内面的な質の様子」と「外面的な様相の現れが「豪快だ」「潔い」「見事だ」」という意味的区別に対応すると主張している。

しかしながら、実際の用例を見てみると、杉村 (2010) が主張する形式と意味の対応が成立していないと思われる事例が存在する。

(5) 「…結局、一名の怪我人を含めた三人の銃士と一人の子供とで、枢機官の護衛士のうちで、もっとも腕ききの五人の者と堂々渡りあったばかりでなく、そのなかの四名を倒したのでございます」「あっぱれな勝ちぶりだな、それは申し分のない勝利と申すものだ」国王は喜びに顔を輝かせて叫んだ。 (BCCWJ)

(6) [先発投手の] 凜とした立ち姿、さっそうとした投げっぷり。 (BCCWJ)

(5) 「あっぱれな勝ちぶり」では「勝つ」という事態の内的な動作が「あっぱれ」であるとは言えず、また (6)「さっそうとした投げっぷり」は「事態の外面的な様相の表れに対する評価」を表すとは言えないであろう。こうした例を見ると、むしろ、 (4) と (5)(6) は、形式と意味の特徴が互いに反対の関係になっていることが分かる。杉村 (2010) の主張する「-ぶり」「-っぷり」の意味的差異は、どちらかと言えば、修飾要素の意味的特性を反映したものと考えられ、それが形式的差異に直接対応しているとは言えない。

以上、「X ぶり」を意味的に考察した研究として、杉岡 (2005) と杉村 (2010) を取り上げ、その問題点を指摘した。両者に共通して指摘できる点として、より詳細な「-ぶり」の意味記述が必要であることが挙げられる。また、「X ぶり」には多様な品詞が前接要素に生起するにも関わらず、動詞連用形が前接する事例（例 : 飲みっぷり）のみを中心に考察されており、名詞など他の品詞が前接要素となる事例があまり考察されていないことも指摘できる。以上の先行研究の課題を踏まえ、以下では、コーパス調査に基づいて「X ぶり」の観察と意味分析を行う。

3. 「X ぶり」のコーパス調査と観察

国立国語研究所による BCCWJ を用いて「様態、様子」を表す「X ぶり」の実例を収集した。検索には『中納言』を使用し、すべてのジャンルを対象として用例を収集した。[4] 検索の結果、まず 12,730 件が抽出され、目視で考察対象の用法かを確認し、その後で重複例や別の用法で使われている例を除外した。その結果、3,042 例（異なり語数 1,189 例）を考察対象として抽出した。[5] 前接要素の品詞毎にその用例数をまとめたものが表 1 である。

[4] 中納言における検索方法は、「キー@指定しない＋後方共起 1 キーから 1 語「語彙素 : 振り」」である。

[5] 考察対象から除外した「-ぶり／-振り」の用法には、次のものが含まれる : (i) 大きさ・分量（例 : 小ぶりの茶碗）、(ii) 期間の経過（例 : 十年ぶりの優勝、しばらくぶりですね）、(iii) 振り動かすこと（例 : バットの一振りで）、(iv) 刀剣の数

n=3,042

品詞	名詞	動詞連用形	副詞	形容詞
用例数	2,319 (76.23%)	694 (22.81%)	27 (0.89%)	2 (0.07%)

表 1　前接要素の品詞に見る「X-ぶり／-っぷり」の用例数

表 1 における前接要素 X の品詞の分布を見ると、名詞が 76%と大多数を占めることが明らかとなった。次いで動詞連用形（約 23%）が多く、残りが副詞と形容詞となった。形容詞に至っては、極めて限定的な出現頻度であった。[6] これは、杉岡 (2005: 注 11) が既に指摘しているとおりである。「X ぶり」の用法を分析するにあたっては、このような品詞の分布頻度の差を考慮した分析を行う必要がある。

表 1 の結果で注意したいのが、形容動詞やいわゆるサ変動詞の語幹を、「名詞」として分類している点である。日本語の名詞には、「努力家 {な／の} 人」「近代化 {する／を行う}」が示すように、形容詞や動詞との間で「多範疇性（範疇の兼務）」を示す表現が少なくない（水谷・星野 1994、大島・林 2021）。このことは、用例の分析に際して前接要素の範疇を特定することを難しくしている。しかし語幹単体で見れば、その基本的な機能は「名詞」であると考えることができる（実際、両者は、Martin (1975) や 影山 (1993) ではそれぞれ「形容詞的名詞（adjectival noun）」「動詞的名詞（verbal noun）」と分類される）。本稿は、「-ぶり」の前接要素としての特徴を考察する目的から、以上の考え方を踏襲して、形容動詞・サ変動詞語幹を「名詞」と分類している。

表 1 の結果を踏まえ、以下の議論では、前接要素が名詞の場合（「N ぶり」）と動詞連用形の場合（「V ぶり」）に考察対象を絞り、それぞれの意味的分析を行う。

4. 「N ぶり」の考察と意味分析

まず、「N ぶり」の例を考察する。4.1 節は、BCCWJ の用例を対象に、N の意味内容に基づき分類を示する。続く 4.2 節で、「N ぶり」という表現全体の意味について分析を行う。

4.1. 前接名詞の意味に着目した「N ぶり」の意味分類

「N ぶり」の意味を分析するため、BCCWJ で観察された例の前接名詞をまず意味的に分類し、その語彙的な傾向を考察する。分類は、N の意味的類似性と、「N ぶり」としての意味の共通性（4.2 節を参照）に基づいて行った。しかし、中にはどこに分類すべきか判断に迷う例もあり、加えて、各タイプに分類された事例は、捉え方や文脈によって、別のタイプ

量を表す単位（例：一振りの小刀）、(v) それらしく振る舞ったり、そのように見せかけようとすること（例：知らない振り、思わせぶり、利口ぶる）のような派生動詞からの転成と思われる用法）。杉岡 (2005) や Sugioka (2010) では、(v) の用法が本稿で扱う「-ぶり」の用法と関連する可能性を指摘している。

[6] BCCWJ で見つかった「形容詞+ぶり」の 2 例は、「今度はおいらの走れないっぷりがすさまじい。」のように口語調の文体で、前接要素は引用成分としての性格を思わせることで共通していた。執筆者の内省判断としてもかなり容認しにくい表現で、周辺的な事例といえる。

ちなみに、杉岡 (2005) でも「だらしなぶり」(同: 86) を挙げる一方、「?*見苦しぶり」「?*彼女の美しぶり」のように基本的に「形容詞+ぶり」は容認されにくいと述べている。

として分類できるものもあった（例えば、「田舎」は A 類〈場所〉と C-1 類〈属性〉の間で判断が難しい）。従って、厳密な区分ができているとは言えない（但し、各分類は離散的なカテゴリーとしてではなく、相互に地続きの特徴を持った「連続体」として捉えるべきものと思われる）。このように今後検討すべき課題はあるものの、前接名詞の意味をもとに「N ぶり」のおおまかな共通性や傾向を捉えるという本稿の目的にとっては、以下の分類はひとまず十分有効であると考える。

なお、分類の提示に際して、例文番号を付した代表例を示す[7] とともに、BCCWJ のデータで観察されたその他の名詞も、参考資料として非網羅的に掲載している（本節で提示する例は全て BCCWJ から確認されたものである）。

A 類：人、動物、植物、物、場所、状況・場面

まず、具体的な〈個体（object）〉を表す名詞を挙げる。「人」(7)「動物」(8)「植物」(9) のような有生物名詞から、具体的・抽象的な「物」を表す名詞 (10)、「場所」(11) や「状況・場面」(12) といった時空間的広がりのある実体を表す名詞などが観察された。

(7) [彼]の父親は立派な風采の人物だった。四十の半ばになっているだろうが、りゅうとした身なりで、足の運びも颯爽としている。胸は厚く、肩は広く、なかなかの男ぶりだ。【人】

(8) 此処は良い馬が勢揃いです。堂々たる馬っぷり。好馬体。【動物】

(9) この大ケヤキは、[小学校]の校庭の一角にあって大樹ぶりを発揮しているが...[†] 【植物】

(10) 母の心といえば、文箱の中に短冊が二枚流麗な筆ぶりでしたためられていた。【物】

(11) 福岡県太宰府市太宰府天満宮。... かつて道真が活躍した平安の都ぶりの様式を伝える衣冠・直垂などの装束で御輿に供奉する五百人の行列が絵巻のように華麗。【場所】

(12) 商店街の雑踏ぶりは身動きひとつできないほどで、馬車がわんさと押し寄せて、さながら園遊会の趣きを呈した。【状況・場面】

【人】女、少女、大人、子供、美女と野獣…；【動物】騎馬、わんこ、ネコ、（夫婦の）おしどり…；【植物】枝、葉…；【物（具体物／抽象物）】仮面、出っ歯、筆、高貴薬、打球、茅屋… ／（髪の毛の）ツヤ、サービス、食欲、精力…；【場所】都会、田舎、居酒屋、世俗…【状況・場面】公害、フィーバー…

表 2　A 類として分類される前接名詞

各例の意味を考えると、(7)「男として容姿、風采のよさ」、(8)「（競走）馬としての体つき」、(9)「大樹としての様子、存在感」、(10)「筆で書いた文字の体裁、美しさ」、(11)「都の風俗、習慣、生活、都らしい物事」、(12)「雑踏の混み具合、往来の忙しさ」といった内容である。

[7] 各例では、「N ぶり」に下線を、それが表す意味内容が帰属する《対象》項（4.2 節参照）に破線を付している。

これらの例には 2 種類の意味的特徴が見て取れる。一つは、「ある《対象》に見られる、カテゴリー（N）としての《特徴》」を表す場合であり、(7) (8) (9) (12) がこれにあたる（(12)の「商店街」は「商店街の人々」という意味のメトニミー表現と捉えられる）。もう一つが、「ある《対象》に見られる、N に概念的に隣接する物事の《特徴》」を表す (10)(11)のような場合である。つまり、N とメトニミー（metonymy）の関係にあるものの《特徴》を表す。前者は、「X ぶり」の意味内容が帰属する《対象》Y が、「X というカテゴリーの成員」として分類できる。すなわち、「帰属関係」（Y∈X）が成立する。例えば、(7) の「父親」（Y）は「男」（X）というカテゴリーに属し、そこに見られる《特徴》を有することを表す。これに対して、後者はそれが成り立たない。例えば、(10)「短冊」は「筆」に属していない。むしろ、「短冊が筆で書いた文字を有する」といった、Y が X（に隣接した個体（モノ））に関する特徴を所有するという「所有関係」にある。

帰属関係か所有関係かという違いは、前接名詞 X と《対象》Y の意味関係を基準とした分類であるが、この違いは 4.2 節で見るように、「X ぶり」という表現が《対象》Y に認識される《特徴》を表すことに起因すると考えられる。しかし、両者に共通しているのは、様々な「個体（object）に関する《特徴》を表す」という点である。

B 類：職業、役割、称号・呼称

前接名詞が「職業」や「役割」を表したり、「称号・呼称」を表す場合もある。このような「N ぶり」は「ある《対象》に見られる、N としての典型的な振舞い、行動」を喚起し、それが《対象》Y の《特徴》として描かれる。以下の例では波線部が具体的な「振る舞い、行動」を指し示している。

(13) [ロバート・レッドフォード監督は] いざ撮影が始まっても、声を上げて怒ったりすることなど一度もなく、いつもおだやかに、それでいてリーダーシップにあふれた監督ぶりを見せてくれたわ。 【職業】

(14) [コロンブスの父ドメニコは] 町での人望は篤く、ギルドの役員に選ばれていたけれど、妻や家族にとっては頼りにならない人間だった。それでも男の子にはすばらしい父親だった。天気がよければ、店を閉めて、魚釣りに連れて行ってくれた。そんなよき父親ぶりが、欠点を帳消しにした。 【役割】

(15) [書家の巻菱湖は] 弟子の数、千人、刊行された手本の数、二百種という時代の寵児ぶりであった。 【称号・呼称】

【職業】監督、先生、執事、舞妓、武者、キャスター、コメディアン、モデル、プロデューサー、マエストロ…；【役割】父親、母親、パパ、ママ、お姉さん、兄貴、舎弟、リーダー、サブキャラ、ヒール、傍観者、司会…；【称号・呼称】英雄、巨匠、剣豪、No.1 ホステス、ギャング、おじさん、えらいサン、マニア、時代の寵児、伏魔殿…

表 3　B 類として分類される前接名詞

例えば、(14)「よき父親ぶり」であれば「よき父親」という役割に見られる行動が喚起される。「よき父親」という表現単体では、それが想起する内容は、文脈や聞き手（読み手）によって異なってくる。しかし (14) では、前文で「魚釣りに連れて行ってくれるような、父親としての優しさ」が描写され、その内容を具体化している。このように、「職業」や「役割」を表す前接名詞は、それらが典型的に想起する何らかの行動や振舞いに関する《特徴》が喚起され、前後文脈等で具体的にその内容が示される。

C 類：特徴（サマ）

C 類は、前接名詞そのものが何らかの《特徴（サマ）》を表すグループである。これには「個体（モノ）の《特徴（サマ）》」と「事態（コト）の《特徴（サマ）》」があるが、ここでは便宜上これらを一つにまとめている。C 類が表す《特徴》には、〈属性〉、〈関係〉、〈状態〉および〈様態〉、〈程度・量〉が含まれる。[8] これらの概念は、《対象》に帰属し、何らかのスケール上の値を表す C-1 類と、ある動作の〈様態〉や動作・変化の〈程度・量〉を表す C-2 類に下位区分される。つまり、C-1 はモノや状態のサマ、C-2 は動作や変化のサマである。

C-1 類：属性、関係、状態

C-1 類の名詞類は、状態性の高い概念を表し、その多くはいわゆる「形容名詞（adjectival noun）」（Martin 1975、影山 1993 など）（ナ形容詞）としても機能するものである。

(16) [彼は] 千九百九十二年にデビューし、そのあまりのハンサムぶりに、「貴公子シンドローム」が吹き荒れた。 【属性】

(17) [二人について] ある評者は、その技倆の互角をいい、ある観者は、その姿の伯仲ぶりを口にする。 【関係】

(18) 夕方近い時間なのに、広い店内がほぼ満員という [そば屋の] 盛況ぶりに、驚いた。 【状態】

【属性】（人の属性）いたずらっ子、暑がり、お人好し、マスコミ嫌い、多彩、無責任、傍若無人、健啖、酒豪、厚顔、強心臓、運動音痴、…；（物の属性）金食い虫、季節外れ、高品質、絢爛、豪壮、モダン…；（事態の属性）ムチャクチャ、支離滅裂…；【関係】おしどり夫婦、仲良しさん、主従、双子、蜜月、伯仲、（素晴らしく気の合う）友人、交錯、二人三脚…；【状態】盛況、人気、好調、興奮、元気、多忙、酒乱、有頂天; 親密、緊密、満場、アンバランス…

表 4　C-1 類として分類される前接名詞

ここでの〈属性〉という用語は「永続的な状態」を指し、〈状態〉は「一時的状態」を指すものとし、両者はアスペクト特性、特に、時間的限定性の有無に基づく区別である。形容詞述語文の研究で知られているように、両カテゴリーは、話者の事態把握のあり方によって境界をまたぐ「相互転換」が可能であり、語彙のレベルで両者を明確に線引することは難し

[8] これらの概念カテゴリーは、副詞的修飾研究において典型的に言及される分類を参考にしている。

い。[9] 一方、〈関係〉は、〈属性〉と〈状態〉の双方にまたがる状態性の概念と捉える。つまり、〈属性〉としての〈関係〉と〈状態〉としての〈関係〉が存在する。C-1 類の「N ぶり」は、「...は N という｛属性をもつ／関係だ／状態だ｝」というパターンに生起できる。

C-2 類：様態、程度・量

C-2 類の名詞は、C-1 類に比べると出現頻度も少なく、周辺的事例と言える。

(19) この時の秀行自身の一生懸命ぶり、働き様は小生のみしか知らないことである。【様態】

(20) ヒトの細胞一つには、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』全三十巻を三度か四度繰り返し記憶できるだけの情報容量がある。ヤナギの種子やアリの容量がどれほどかは知らないが、まず似たような桁はずれぶりだろう。【程度・量】

【様態】早急、堅調、威風堂々、右往左往…；【程度・量】底抜け、盛り沢山、桁はずれ…

表 5　C-2 類として分類される前接名詞

〈様態〉は何らかの動作や変化を背景とし、そこに付随する（特に非スケール的）特徴を描写する概念である。これを表す「N ぶり」の表現は、「...は N という｛属性をもつ／関係だ／状態だ｝」というパターンに生起できない（例：秀幸は一生懸命という｛*属性をもつ／*関係だ／??状態だ｝）。同様に、〈程度・量〉の例もこれらの構文パターンに適合しない。モノの量や度合いを名詞化した表現ゆえである。

D 類：抽象概念

D 類の名詞は、形態論的にも特異な性質を持った周辺的事例である。具体的には、接尾辞「-さ」による形容詞派生名詞や、外来語名詞として抽象概念を表す名詞が該当する。[10] どちらも、ある《対象》が抽象概念に関する《特徴》、特に〈属性〉としての《特徴》を有することを表している。このため、実質的には C-1 類と近い意味を表すと考えられる（例：「タフさぶり」vs.「タフぶり」）。実際、「...は N という属性をもつ」というパターンに生起できる（例：本隊はタフさという｛属性をもつ／*関係だ／*状態だ｝）。

(21) そして本隊は徹夜で撮影して、私が起きたあとの翌朝 6 時四十五分に帰ってきた。この雪の中、何というタフさぶり。【抽象概念】

[9] ちなみに、工藤 (2012) では、奥田 (1988) に従って、本稿で〈属性〉と呼ぶカテゴリーのうち、状態へ移行不可能なものを〈特性〉、移行し得ないものを〈質〉と呼んでいる。〈関係〉は〈特性〉と〈質〉の中間に位置づけられ、「相対的に恒常的」なカテゴリーされている（工藤 2012: 158）。本稿での〈関係〉を表す名詞には、二者間の永続的（恒常的）状態を表すもの（例：双子ぶり」）もあれば、一時的な状態を表すもの（例：二人三脚ぶり）もあるため、〈属性〉と〈状態〉にまたがるカテゴリーと捉えている。

[10] 執筆者の内省では、前者の場合には拡張的に「X ぶり」が使用されたような、周辺的な例としての印象をもつ。

【抽象概念】運の無さ、空気の読めなさ、したたかさ、タフさ、情けなさ、タフネス…

表 6　D 類として分類される前接名詞

E 類：事態（動作、変化、状態・存在）

E 類の名詞は、事態そのものを表す。事態の種類としては、〈動作〉(22)、〈変化〉(23)、〈状態・存在〉(24) を表すものなど、実に多様な出来事が含まれる。漢語名詞や外来語名詞は、「する」が後続して動詞となる「動名詞（verbal noun）」（Martin 1975、影山 1993 など）、いわゆるサ変動詞語幹であることが多い（3 節の議論も参照）が、必ずしも「する」が後続できるとは限らない（例：「ろうぜき（狼藉）」「心痛」「信心」など）。

(22) まさに“帝王”カラヤンらしい貫禄と余裕を感じさせる指揮ぶりで...　【動作】
(23) [わが国の経済は] 世界経済のなかで最も安定した成長ぶりを示し、先端技術産業の急速な発展、世界最大の債権国などの印象が強いわが国の経済も ...　【変化】
(24) 彼の頬は自分の信仰する神像から信心ぶりに合格の合図をあたえられた信者のように紅潮していた。　【状態・存在】

【動作】仕事、活躍、徹底、プレー、親孝行…、初陣、戦、ろうぜき、競馬…；【変化】成長、変貌、落胆、エスカレート、高齢化、心痛…；【状態・存在】生活、充実、熱中、存在、健在、信心…

表 7　E 類として分類される前接名詞

また、〈状態・存在〉タイプは、C-1 類と異なり「...は N という状態だ」というパターンに適合しない。「ある状態」という「スケール上の値」だけを表すのではなく、「その値をもつ」という、時間的展開のある「事態」そのものを表すためである。この事態そのものを指すという特徴は、後に見る動詞連用形の事例（「V ぶり」）との並行性を想起させる。

以上、BCCWJ において観察された「N ぶり」の事例を意味的に分類しながら概観した。

4.2.「N ぶり」の意味分析

以上の BCCWJ からの用例観察に基づき、次に「N ぶり」の意味を考察する。重要な特徴として、(i)「《対象》の存在」、(ii)「《特徴》の非指示性」、(iii)「属性としての《特徴》と直接観察制約」の 3 つが挙げられる。

[1]《対象》の存在

まず最初に確認したいのは、「N ぶり」は、その意味内容が帰属する《対象》として、何らかの項を意味的に要求する点である。4.1 節でも触れたように、「X ぶり」という表現は一般に、それが表す意味内容がある実体に存することを表す。「よい枝ぶり」であれば、「枝としての伸び具合」を有する何らかのモノ（項）（例：木）が存在するということである。この項は、談話上の既知情報として、単文内では省略されることも少なくない（4.1 節の例で

言えば、例えば、(7) (8) (13-16)、(18)(21)(23)など)。この《対象》項が文中に生起する場合、連体（被）修飾成分として (25)、あるいは、文の主要な格成分として現れる (26)。

(25) 枝ぶりのよい木 (＝(2))／諸事都ぶり (＝(3))／秀行自身の一生懸命ぶり (＝(19))
(26) この大ケヤキは、... 大樹ぶりを発揮している (＝(9))

[2] 《特徴》の非指示性

二点めとして、「N ぶり」が「N の指示対象」を表すのではなく、「《対象》がもつ N に関する何らかの《特徴》を表す」という点が挙げられる。例えば、指示的な表現は前接名詞としても修飾要素としても共起できない（例 : *石田さんぶり、*木の[この枝]ぶり、#彼の例の男ぶり)。様々な辞書の記述やこれまでの先行研究では、「N ぶり」の意味を「N の「様子」」として捉えられてきた。「様子」とは、いわば「N」に関する何らかの（外見的）《特徴》である。また《特徴》とは何らかの属性や性質を表すものであるから、指示的な前接名詞が不適格となることには納得がいく。

さらに、このことは (3) のような、「N でない実体」に対して「N ぶり」が用いられた例のを説明する。(3) の「N ぶり」の例では、N に関する属性や性質を以て、別のカテゴリーに属する《対象》を叙述しているのである。同様に、次の例では、「秋田の角館」に「京都」としての《特徴》を見出しており、それが「(角館の）京好み」というという状態を表す表現と並列されている。ここでも、「京都ぶり」が具体的な場所を表しているのではなく、「京都らしい特徴」を指し、「京都ではない」角館がそれを有することを描写している。

(27) この義明らの京都見聞もまた、北家家中の京文化への憧憬、ひいては角館の文化の発展に少なからぬ影響を与えることになる。それはやがて町衆にまで波及浸透していって、「[秋田の]角館の京都ぶり」「角館の京好み」という、風土が形成されていく… (BCCWJ)

[3] 属性としての《特徴》と直接観察制約

非指示的な《特徴》という捉え方をさらに突き詰めて考えると、それは、前接名詞に関する ‘attribute’ としての「属性」と理解できる。人間は、知覚した対象から何らかの顕著な特徴を認識し、それを描写することができる。例えば、知覚対象が人間の場合、その[身長]、[体格]、[年齢]に関する具体的な特徴を読みとったり、推測したりすることができる。また、「優しそう」「怒っている」など、[性格] や [心理状態] といった内面的特徴も判断できる。行動や振る舞いからは「父親」「先生」といった [役割] に関する特徴を見てとる場合（例 : （父親として）子供に優しい、（先生として）わかりやすく説明できる）もあれば、「監督」といった [職業] の観点で特徴を認識することもある (例 : [監督として] 的確な指示を出す)。

このような《対象》に対する《特徴》の認識は、人が外界認識の際に用いる、カテゴリー

化という認知処理の方法に根ざしている（Lakoff 1987）。ある事物を認識した時、それが既存のカテゴリーに属するか否かを、その事物から読み取られる属性（attribute）とカテゴリーに典型的に付随する属性を比較し、その類似性に基づいて判断する。「N ぶり」はそうした、話者が《対象》に対して認識する何らかの属性を、前接名詞の概念に基づいて表す、と考えられる。

‘attribute’としての属性はその構成要素として、指示的な項（referential argument）と属性の値を表す項（value argument）の 2 つを要求する（Pustejovsky and Batiukova 2019: 229-230）。「色」という語は、例えば「車」のような属性の所有物と、属性の具体的な内容である「赤」のような属性値を項に取る（つまり、「色（車, 赤）」という関数として捉えられる）。「N ぶり」も、指示的項である《対象》と、属性の具体的な内容を表す《属性値》を項として意味的にとる。例えば、「彼の男ぶりは立派だ」という文であれば、《対象》として「彼」、《属性値》として「立派だ」を選択している（「男ぶり（彼、立派だ）」が成り立つ）。このように、「N ぶり」が表す《特徴》とは、《対象》と《属性値》を表す表現を項として選択する‘attribute’としての「属性」として分析できる。

さらに、「N ぶり」が表す「属性」は、N が喚起しうるどのような《特徴》をも表すわけではない。「男」という語が喚起しうる《特徴》には、「力の強さ」「筋肉」「声の低さ」「体型」といった生物学的特徴や、「大人の男性」「父親としての役割」のような社会的・文化的価値観を反映した様々な知識も含まれているはずである。また、それは話し手（書き手）の知識・経験やそれが属する社会・文化によって、解釈にも揺れが生じるはずである。しかし、「男ぶり」という表現は、辞書の記述にあるように、「男性として好ましい、ふうさい、顔つき」（『新明解国語辞典第八版』）というような、概念化者が「直接観察可能な」《特徴》だけを取り出すように慣習化されている。つまり、五感で知覚して、その存在を直接観察・確認できる《特徴》でなければならない。[11]「枝ぶり」(2) 「馬っぷり」(8) も同様で、それぞれ「枝の伸び具合や差し出たさま」や「（競走馬としての）筋肉の付き方、体形」を表す。

「N ぶり」が《対象》から直接観察できる物理的、外見的特徴を表すという点は、(13)「リーダーシップにあふれた監督ぶりを<u>見せてくれた</u>わ」、(23)「[わが国の経済は] 世界経済のなかで最も安定した成長ぶりを<u>示し</u>...」のように、（使役的）知覚行為を表す動詞が述語として多く後続することからも裏付けられる。表 8 が示すように、BCCWJ で観察された「N ぶり」を目的語にとる述語動詞 560 例のうち、知覚行為を表す動詞が 40%（224 例、下線の

[11] Sugioka (2010: 154) でも、‘... *-buri* basically selects verbs that denote observable event because it literally means ‘appearance.’ So it cannot felicitously attach to verbs that do not imply physical appearance, for example, verbs of mental activities ...’（-ぶりは字義的には「外見」を意味するので、観察可能な出来事を表す動詞を基本的に選択する。従って、例えば心的活動を表す動詞 [??考えぶり／*知りぶり] とのように身体的外見を表さない動詞とは適切に接続できない,（執筆者訳））と、本稿と並行的な指摘をしている。

本稿での分析と Sugioka (2010) の分析の大きな違いは、本稿では Sugioka (2010) のように前接要素の選択制限として「観察可能な特徴」という規定を仮定するのではなく、「N ぶり」や「V ぶり」という表現全体が「《対象》から直接観察可能な《特徴》」を表すという制限として記述している点である。すなわち、「観察可能性」という制約を、Sugioka (2010) では「-ぶり」の前接要素に課される入力（input）上の制約と捉えているが、本稿では「X ぶり」という出力（output）に課せられる制約と捉えている点で異なる。Sugioka (2010) では、以下で見る (28) のように、「X ぶり」の使用そのものに関わる制約は問題となるが、本稿の分析ではうまく捉えることができる。

動詞）を占める。

n=560

述語動詞	頻度	述語動詞	頻度
見る	64	語る	8
発揮する	56	眺める	8
示す	32	思い出す	8
見せる	21	披露する	6
知る	12	上げる	6
伝える	11	紹介する	6
アピールする	11	聞く	6
目の当たりにする	11	考える	5
見せつける	9	誇る	5

表 8　BCCWJ における「N ぶり/-っぷり」を補部にとる述語動詞（一部）

また、「N ぶり」は、何らかの推論に基づいて導かれた帰結を表すことが難しい。(28) では、話者がある状況を目にして、それを根拠に推論される状況を「N ぶり」が表しているが、そのような場合、「N ぶり」は容認されない。

(28) a.　*　沢山の街路樹がなぎ倒されているから、昨夜は大変な荒天ぶりだったんだ。
（cf. 沢山の街路樹がなぎ倒されているから、昨夜は大変な荒天だったんだ。
b.　*　刀や鎧がぼろぼろになっているから、その侍は戦でかなりの奮闘ぶりだったようだ。
（cf. 刀や鎧がぼろぼろになっているから、その侍は戦でかなり奮闘したようだ。）

(28) の「N ぶり」が容認されないのは、直接観察可能な状況ではなく、推論に基づく状況を描写しているためだと説明することができる。

さらに、《特徴》の内実を考えてみると、「N ぶり」の表す意味的特徴に一定の共通性があることが分かる。例えば、C-1 類の (18)「盛況ぶり」が表す《特徴》について考えてみよう。例えば、「多くの人が訪れる」「ひっきりなしに人が集まって、店員もせわしなく動いている」という状況が想起できるだろう。これは、「盛況ぶり」が「盛況」という〈状態〉に付随する様々な〈個体（モノ）〉や〈事態（コト）〉を喚起し、そこから《対象》である「店（そば屋）」の〈状態〉〈様態〉〈量〉を表すことを示している。〈状態〉〈様態〉〈量〉の具体的な内容については、前後文脈、特に「N ぶり」の修飾要素が詳述する。以下の BCCWJ のデータでは、「盛況ぶり」の前後に生じる要素から、多様な概念が喚起されていることが窺える。

(29) a.　広い店内がほぼ満員という盛況ぶり　[〈個体〉の〈状態〉]
b.　予定された時間内に完売する盛況ぶり　[〈事態〉の〈様態〉]

c. [店員が料理を] 通常の３倍の量を用意した盛況ぶり

[〈事態〉における〈個体〉の〈量〉]

この例の下線部は、「N ぶり」が表す《特徴》の具体的内容を表す《属性値》にあたる。すなわち、「盛況」という〈状態〉を、下線部が具体化しているのである。C 類と近い意味を表すと思われる D 類 (21)「タフさぶり」も、同様に、「タフさ」という〈抽象概念〉から喚起される《特徴》を表し、その具体的な中身は、前後文脈で示される様々な概念によって指定されている。

一方、上述の (2)「枝ぶり」（A 類）などは、枝の「伸びた形」「伸び具合」という〈状態〉〈程度・量〉を表しており、「筆ぶり」（A 類）も「文字を書く」際の動作の〈様態〉や「文字」の形という〈属性〉を表している。B 類に該当する「武者ぶり」は、「戦での勇ましさ、大胆さ」といった「武者」にまつわる、ある事態での〈様態〉やそれに関する人の性質の〈程度〉を表す。「仕事ぶり」（E 類）では、仕事をする主体の動作の〈様態〉や主体の態度といった〈状態〉のことを指している。

このように、「N ぶり」が表す《特徴》とは、前接名詞 N が喚起する〈属性〉〈状態〉〈関係〉〈様態〉〈程度・量〉といった概念であり、その具体的な内容は前後文脈における他の要素によって指定されるのである。そして、上で強調したように、その具体的な〈属性〉〈状態〉〈関係〉〈様態〉〈程度・量〉といった概念は、概念化者にとって《対象》から直接観察できるものでなければならない。以上の議論をまとめると、「N ぶり」が表す意味は次のように一般化できる。

(30) 「（Y の）N ぶり」の意味的一般化

a. 「（Y の）N ぶり」は、N が喚起する様々な〈個体〉・〈事態〉に関わる副次的な意味概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表す。

b. 副次的な意味概念とは、〈個体〉・〈事態〉のサマ（〈属性〉、〈状態〉、〈関係〉、〈様態〉、〈程度・量〉）である。

このように考えると、なぜ前接要素として形容詞の生起が少ないのかが説明できるだろう。それは、形容詞というカテゴリーがある物事に関する様々な《特徴》を表し、それが「-ぶり／-っぷり」の機能と重複するためである。言い換えれば、「-ぶり／-っぷり」とは、ある《対象》に直接観察される様々な《特徴》を、前接要素が表す概念に基づいて取り出す接辞であるから、そうした概念を表すことを本務とする形容詞表現は、もともと具体的な《特徴》を表すため、共起しにくいのだと考えられる。

また、名詞であっても、「美しさ」「広さ」「大きさ」のような派生名詞や「綺麗」「広大」「静か」のような形容名詞では、属性・状態概念自体を表し、《対象》に関してそれ以外の何らかの観察可能な《特徴》を喚起しにくい名詞は、「*美しさぶり／*広さぶり／*大きさぶ

り」「*綺麗ぶり／*広大ぶり／*静かぶり」のように容認されない。前接名詞が何らかの〈属性〉・〈状態〉を表す場合には、むしろ、「いたずらっ子」「暑がり」や「季節外れ」「高品質」「人気」など、N の概念から〈個体〉や〈事態〉に関する様々な観察内容が喚起されやすい場合に、「N ぶり」が要因されるのだと考えられる。

5. 「V ぶり」の考察と意味分析

4 節の「N ぶり」の分析を踏まえた上で、次に、「飲みっぷり」のように、動詞連用形が前接する「V ぶり」について考察する。「V ぶり」に関しては、これまでの研究で「V 方」「V 様（よう）」「V 様（ざま）」「V 具合」といった表現との関係性が度々指摘されている（井上 1990: 110, 杉岡 2005: 84-85, 杉村 2010: 138 など）。以下では、最も生産的な派生名詞である「V 方」を取り上げ、その用法と比較しながら、「V ぶり」の意味について分析を行い、両者の相違点を明らかにしたい。

5.1. 「V ぶり」に生起する動詞とその形態

まず、BCCWJ で収集した用例で「V ぶり」としてどのような動詞が生起しやすいのかを確認する。「-ぶり」に前接する動詞連用形と用例数の上位 20 語を以下に示す。

n = 694

順位	動詞連用形	用例数	順位	動詞連用形	用例数	順位	動詞連用形	用例数	順位	動詞連用形	用例数
1	暮らし	121	6	食べ	23	11	歩き	11	16	落ち着き	8
2	話し	90	7	飲み	21	11	負け	11	17	使い	6
3	戦い	64	8	慌て	19	13	歌い	9	18	狼狽え	6
4	働き	57	9	走り	14	14	行き	8	19	ハシャギ	4
5	書き	26	10	闘い	14	15	勝ち	8	20	もてなし	4

表 9　BCCWJ における「-ぶり」に前接する動詞連用形の用例数上位 20 語

表 9 を見てみると、まず、何らかの動作を表す動詞が多いことに気づく。「行く」「勝つ」「負ける」「落ち着く」「うろたえる」「はしゃぐ」など、主体変化の動詞も見られる。なお、杉村 (2010: 133)、Sugioka (2010: 156-157) も観察しているように、動名詞はスルが後続すると「-ぶり」がつけられず、スルが付かない語幹形式でのみ「-ぶり」に接続できる。これは「-方」と対照的な振舞いである。「-方」はスルが動名詞に後続した形、特に、「動名詞＋属格「の」＋スル（の連用形）」の形でしか容認されない。

(31) a.　仕事-ぶり／*仕事し-ぶり／*仕事のし-ぶり
　　b. * 仕事-方／*仕事し-方／仕事のし-方

また、動詞に受身の助動詞ラレが付加された例（計 6 例）や、複合動詞が前接した例（計 21 例）も見つかった。受身ラレなどのヴォイス接辞や複合動詞に前接する点は、杉岡 (2005: 89) や Sugioka (2010: 153) でも指摘されているが、これは「V 方」でも並行的に見られる。

(32) a. いたぶられっぷり、嫌われぶり、叱られっぷり、持て囃されぶり …
b. 割り切りぶり、ささくれ立ちぶり、空回りっぷり、張り切りぶり、落ち着きぶり ...

(33) a. 使われ方、遊ばせ方、働かされ方、うれしがり方
b. 飛びはね方、歩き回り方、読み続け方、やり直し方

(杉岡 2005: 89)

慣用句の生起について、杉岡 (2005: 90) では「V 方」は慣用句が前接要素として生起できるが、「V ぶり」はそれができないと指摘している（例：彼らしくないお茶の濁し方／?*お茶の濁しぶり）。[12] しかし、「だだをこねる」という一例だけであるが、BCCWJ で確認されている（「あのときの秀吉のだだのこねぶりは ...」(BCCWJ)）。句の前接の例は、「N ぶり」の場合も観察される（例：「いい男ぶり」「時代の寵児ぶり」(BCCWJ) など）。これらの事例から、「-方」と同様「-ぶり」も慣用句を含む句レベルの表現が前接できると分かる。

杉岡 (2005: 89-90) では、「「-ぶり」が「-方」ほどの統語的な透明性がない」と指摘されているが、以上の観察を見ると「-ぶり」にも一定の統語的透明性があることは明らかである。

5.2. 「V 方」に対応する「V ぶり」と意味

次に、「V 方」の意味・用法と比較しながら、「V ぶり」の意味分析を行う。まず、「V 方」の意味について考察した先行研究として、井上 (1990) を概観する。井上 (1990) は、「V 方」の意味を詳細に考察し、分類を提案している（影山 1993, 伊藤・杉岡 2002, 藤巻 2003, 杉岡 2005, Kishimoto 2006, 藤巻 2020, 小薬 2023 なども参照）。それは、次頁の表 10 のようにまとめられる。

表 10 が示すように、「V 方」は、〈過程〉〈過程+方法〉〈様態・結果状態〉〈表現・内容〉など、出来事に関してかなり広い範囲の概念を表すことができる。各意味の共通点として、いずれも「動詞とその必須成分とで表される（核命題としての）事態を特徴づける内容」(井上 1990: 103) とまとめられている。井上 (1990) は、これを「（事態）の副次的特徴」と呼んでいる。4.2 節で論じた「X ぶり」が表す《特徴》も、似たような概念を表す点で、この「副次的特徴」とかなり類似している。

[12] 容認性判断は、杉岡 (2005) による。執筆者自身の内省では、「お茶の濁しぶり」は容認可能と判断する。

意味	説明	V 方の例
過程	事態生起・展開のプロセス	台風の発生のし方、あわれな死に方
過程+方法	〈過程〉が主体の意志によって コントロールされる	餃子の食べ方、研究のし方
様態	動作の様態・形態	上品な笑い方、星の光り方
結果状態	主体・対象の 結果状態	石油価格の急激な上がり方 本のひどいいたみ方
表現	発話・伝達の表現	「エルニーニョ現象」という {言い方／呼び方}
内容	思考・認識の内容	「市場開放は時期尚早だ」という｛見方／ 考え方／捉え方／受けとめ方／感じ方}
その他	上のいずれにも限定できないが、 事態の副次的特徴であることに はかわりない内容	数学の日常生活への役立ち方 これからの国語辞典のあり方 相手の出方をうかがう

表 10　「V 方」の意味（井上 1990 を参考に、一部変更）[13]

さらに、井上 (1990) は「V 方」の V としての条件として、「「事態の副次的特徴」を具体的に想定するのが困難な」動詞が不自然になると述べ、いくつかの例を挙げている。例えば、(34) のような状態性を表す動詞は、「存在」「状態」「関係」を表すのみで、副次的特徴を想定することが困難であり、「V 方」として容認されないと指摘する。[14]

(34) ?次郎のい方、?書類のあり方、?冬山での遭難の死の意味のし方

井上 (1990) による「V 方」の意味分類を参考に、「V ぶり」の用法を考えてみたい。表 10 の「V 方」の例に対応する例を考えると、多くが実例として実際に観察されるが、一部容認されない例、また表す意味が「V 方」と対応しない例も存在する（以下、作例やウェブ以外からの例は BCCWJ より）。(35) を「V 方」と対比する形で表にしたものが、表 11 である。

(35) a. * 台風の生じぶり、#あわれな死にっぷり（ともに作例）[〈様態〉解釈なら可]
b. # 餃子の食べっぷり、#用例の調べっぷり（ともに作例）[〈様態〉解釈なら可]
c. [彼女の] 笑いっぷり（BCCWJ）、LED の光っぷり（ウェブ）　〈様態〉
d. 口角の上がりっぷり（BCCWJ）、皮膚の傷みぶり（ウェブ）　〈結果状態〉
e. とげのある言いっぷり（BCCWJ）、*「エルニーニョ現象」という呼びぶり

[13] 井上 (1990) では、ここでの〈様態〉〈結果状態〉をひと括りに「様態」、〈表現〉〈内容〉をひと括りに「内容」と分類している。「V ぶり」と比較しやすいよう、ここではそれぞれを下位区分して提示している。
[14] 他にも、(i) のような可能や自発を表す動詞の例、(ii) のような動詞句そのものに一定の副次的内容が想定されるため容認されない例、(iii) 事態の〈過程〉〈様態〉が想定されるために、別の動作の副次的特徴を想定するのが難しいとされる例も挙げられている (井上 1990: 108-109)。

(i) ??英語の話せ方、??理解のでき方、??想像のされ方、??故人の偲ばれ方
(ii) ?この部屋の暑すぎ方、?降りしきり方、?泣きはらし方、?うち沈み方
(iii) ?食べかけ方、?食べきり方

（作例）〈表現〉

f. *「市場開放は時期尚早だ」という｛見ぶり／考えぶり／受けとめぶり／感じぶり｝（いずれも作例）〈内容〉

g. [丸薬の] お役立ちぶり（ウェブ）、*今までの国語辞典のありっぷり（作例）、*相手の出っぷり（作例）[その他]

意味	V 方	V ぶり
過程	台風の発生のし方、あわれな死に方	***台風の生じぶり、??あわれな死にっぷり**
過程+方法	餃子の食べ方、研究のし方	**#餃子の食べっぷり、#用例の調べぶり**
様態	上品な笑い方、星の光り方	[彼女の] 笑いっぷり、LED の光りっぷり
結果状態	石油価格の急激な上がり方、本のひどいいたみ方	口角の上がりっぷり、皮膚の傷みぶり
表現	「エルニーニョ現象」という｛言い方 / 呼び方｝	とげのある言いっぷり、***「エルニーニョ」という呼びぶり**
内容	「市場開放は時期尚早だ」という｛見方／考え方／捉え方／受けとめ方／感じ方｝	*「市場開放は時期尚早だ」という｛見ぶり／考えぶり／受けとめぶり／感じぶり｝
その他	数学の日常生活への役立ち方、これからの国語辞典のあり方、相手の出方をうかがう	[丸薬の] お役立ちぶり(Web)、*これからの国語辞典のありっぷり、*相手の出っぷり

表 11　「V 方」と「V ぶり」の意味の比較

「V 方」で〈過程〉および〈過程+方法〉を表すとされる動詞が「V ぶり」に生起すると、(35a, b) のように、動作や変化に至る〈過程〉そのもの（「どのようなプロセスで V するか」）を表すとは解釈できず、むしろ、動作・変化に伴う〈様態〉としてしか理解できない。また、(35f) で、思考・認識動詞に、「V ぶり」が容認されにくい点も興味深い（Sugioka 2010: 154）も参照）。[15] さらに、「存在」「状態」「関係」のみ表す状態動詞も、「V ぶり」でも容認されないことが確認できる。

(36) *次郎のいぶり、*書類のありっぷり、*冬山での遭難の死の意味のしぶり

但し、次のような状態動詞は、「存在様態」と言えるような意味を表している。「V 方」においても容認可能と判断できる動詞である。[16]

(37) a.　... 日本人離れした洋服の<u>似合いっぷり</u>だった。　（cf. 洋服の似合い方）

b.　この界隈の<u>にぎわいぶり</u>は大変なものだったと...　（cf. 店のにぎわい方）

[15] 次の例の「割り切りぶり」は認識動詞が前接する例と考えられるかもしれない：「彼はもうわたしに用はないのだ。それは清々しいほどの<u>割り切りぶり</u>、捨て方だった。」(BCCWJ)

[16] 「洋服の似合い方」「店のにぎわい方」は、ウェブ上で実際に観察された実例である。

これに対して恒常性のある属性を表す動詞（いわゆる金田一 (1950) の「第四種動詞」）の場合、「V ぶり」「V 方」双方において容認性が下がる。[17]

(38) ??性能の優れぶり、??その商品のありふれぶり、??富士山のそびえぶり
??性能の優れ方、??その商品のありふれ方、??富士山のそびえ方

「V 方」「V ぶり」の意味的な違いをまとめると、表 11 が示すように、「V 方」は〈出来事の過程〉や〈方法〉および〈思考や認識の内容〉を表すことができるが、「V ぶり」はそれができない。両者が表し得る概念の範囲を比べると、「V ぶり」のほうが表す意味の範囲が狭く、〈過程〉や〈方法〉、〈内容〉を表しにくいことが分かる。一方、「V ぶり」が表しやすいのが、〈様態〉と〈結果状態〉（表 11 の太枠内の箇所）、そして、〈表現〉の一部とその他「役立つ」といった動詞であることが明らかとなった。

「V ぶり」が思考・認識動詞と相容れないという観察 (35f) は、4.2 節「N ぶり」の分析において述べた「直接観察可能な《特徴》を表さなければならない」という制約を応用すれば説明できる。つまり、「V 方」は V が表す事態そのものの特徴、特に、事態がどう展開するかというプロセスを、直接観察可能かどうかに関わらず捉えられる。これに対し、「V ぶり」は「N ぶり」同様、概念化者が直接観察できるような事態の特徴のみを表すのである。

詳細は割愛するが、BCCWJ の調査においても、「V ぶり」が「N ぶり」同様ヲ格名詞として「見せる」「披露する」のような知覚行為を表す動詞に先行する例が多数見られた。一方、「V 方」では、使役的行為の「見せる」「披露する」という述語動詞が後続することは容認性の低下につながるが、これは主体が意志的に事態のサマを見せている解釈となり、主体の特徴について述べる文脈と合致しないためであろう。

(39) a. ウェーク島のアメリカ軍守備隊は勇敢な戦いぶりを見せる。
（cf. ?? ...勇敢な戦い方を見せる。）
b. 周囲を感心させる打ちっぷりを披露しながら、なぜか終盤に乱れが集中する。
（cf. ?周囲を感心させる打ち方を披露しながら ...）

(BCCWJ)

以上の考察から、「V 方」と「V ぶり」の意味の違いを次のようにまとめることができる。

(40) 「V 方」の意味：
「V 方」は、事態の〈展開過程〉の《特徴》を表す。
（cf. 「どのように V か」、井上 (1990)）

[17] ウェブ検索で見つかる用例は、少数にとどまる。話者によっても容認性に差が生じるようである（藤巻 2021: 177, 注 7 も参照）。本稿では、周辺的な用法と判断する。

(41) 「V ぶり」の意味：

「(Y の) V ぶり」は、V が表す〈事態〉が喚起する副次的な概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表す。

両者の意味的差異は、次の例の容認性の差を説明する（例は、杉岡 (2005) より。2.1 節で見た杉岡 (2005) による分析も参照)。

(42) a. 知り方 ‘どのように「知る」に至ったか’

b. ??知りぶり ‘??「知る」ことから観察される特徴’

（cf. 物知りぶり）

「知り方」は、「どのように知るに至ったか」という〈過程〉を表すことになり、自然な解釈となる。これに対して、「知りぶり」は「「知る」という出来事から直接観察される特徴（知る様子)」を表すことになる。「知っているかどうか」を外見から観察できるような特徴は、一般的に想起しにくいため、容認しにくい例となる。但し、「物知りぶり」であれば、例えば、色々な話題についての説明や解説ができるなど、「物知り」であるという〈状態〉が観察できる《特徴》を想起できるので、容認可能となる。

また、「行く」が前接する場合の「-方」と「-ぶり」の解釈の違いも (40)(41)の対比に基づいて説明を与えることができる。

(43) a. 行き方

‘移動の過程、道順、陸路・空路などの手段（どのように行くか）’

b. 行きっぷり

‘競走馬がレースで走る様子、進む速さや伸び、レースでの位置取り’

(43a)「行き方」は、「ある場所へ移動する際、どのように行くか」という「行く」ことのプロセスを表す。また、目的地に行く過程だけでなく、道順、陸路・空路などの交通手段も表せる。いずれも「行く」という出来事の〈展開過程〉に見られる《特徴》（サマ）を表す。これに対して、(43b)「行きっぷり」は、主に競馬用語として用いられ、「競走馬がレースで走る様子、進む速さや伸び、レースでの位置取り」などを指す。「行きっぷり」とは、このように「行く」という行為を概念化者が観察し、評価的に解釈するための《特徴》を表す表現だと言える。

(40)(41) に示した「V 方」「V ぶり」の意味的一般化は、このように、可能な前接動詞だけでなく、その解釈の違いも説明することができる。

5.3. 「V 方」と「V ぶり」のさらなる差異

表 11 に見る対比から、「V ぶり」は「V 方」よりも表す概念の範囲が狭いという点を指摘

した。しかしながら、「直接観察可能性」という観点からさらに詳細に用例を見てみると、「V ぶり」は「V 方」が表し得ないような概念をも表すことが分かる。例えば (44) は、「A 氏の負けた後の発言や態度」を指して、話者が「負けっぷりの良さ」と評している。「負けた後の発言や態度」は、前接動詞「負ける」が表す出来事に直接関与するものではない。しかし、それも《対象》の観察可能な特徴、いわば周辺的な〈様態〉として言語化されている。

(44) A 氏は記者団に「小泉さんの執念が勝ったと思うし、その一貫性は一定の評価をしたい」と "負けっぷり"の良さも見せ...† (Web, 一部改変)
（cf. * ... と"負け方"の良さも見せ...）

しかし、もし「負けっぷり」を「負け方」で置き換えてしまうと、「負ける」というプロセス自体に焦点が当たるため、出来事とは独立した発言や態度を指すことができず、不適格な表現となる。

また、次の「V ぶり」の例では、「稼ぐ」「遊ぶ」という事態に伴う「〈個体〉の量（＝稼いだ金額)」や「〈事態〉の〈程度〉（＝遊ぶ程度・頻度)」を表している。

(45) a. うわさでは稼ぎっぷりも悪くないっていうのに ... [稼いだ金の〈量〉]
（cf. *稼ぎ方も悪くないっていうのに ...）
b. 東京に来てからの僕のかなりの遊びぶりが、どうやら [親に] 漏れてしまったらしい。じかじかに東京に御出張いただいて、さんざんお小言を食った。
[=遊ぶ〈程度〉]
（cf. *東京に来てからの僕のかなりの遊び方が、どうやら...）
(BCCWJ)

このような文脈では、やはり前接動詞が表す概念に含まれない直接指さない事物を言語化することになるため、「V 方」が容認されにくいということが見て取れる。[18]

以上、「V ぶり」の意味を「V 方」と比較しながら考察してきた。特に、「V 方」に関する先行研究の成果を参考に、「事態に関するどのような副次的特徴を表しうるのか」という観点から「V ぶり」の意味を考察した。5 節での議論は、次のようにまとめることができる。

(46) a. 「V 方」は、事態の〈展開過程〉に関する副次的な概念を表す。事態の〈展開過程〉に直接関係する概念（〈過程〉、〈方法〉など）は表せるが、〈展開過程〉から概念的な関連性が低くなるほど容認されにくくなる。

[18] なお、〈程度〉を表す「V 方」の例として、「鍛え方が足りない」(『新明解国語辞典第八版』) が指摘されている。しかし、これは、類似の表現である「??筋肉の｛付け方／付き方｝が足りない」が容認しにくいことから、語彙的に特異な事例と思われる。

b. 「(Y の) V ぶり」は、V が表す〈事態〉を介して喚起される副次的な概念、特に〈様態〉〈状態〉〈程度・量〉(一部の〈表現〉) といった様々な概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表す。従って、〈事態〉から何らかの観察可能な《特徴》が想起できさえすれば容認可能となるが、それができない場合容認されにくい (例 : *知りぶり／*考えぶり／*ありぶり)。

6. 結論と今後の課題

本稿は、BCCWJ から収集した「X ぶり」の事例を観察し、前接要素が名詞と動詞の場合について、意味的な分析を行った。それぞれの分析を以下に再掲する。

(47) 「(Y の) N ぶり」
N が喚起する様々な〈個体〉・〈事態〉に関わる副次的な意味概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表す。副次的な意味概念とは、〈個体〉・〈事態〉のサマ (〈属性〉、〈状態〉、〈関係〉、〈様態〉、〈程度・量〉) である。 (= (30))

(48) 「(Y の) V ぶり」
V が表す〈事態〉を介して喚起される副次的な概念、特に〈様態〉〈状態〉〈程度・量〉(一部の〈表現〉) といった様々な概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表す。従って、〈事態〉から何らかの観察可能な《特徴》が想起できさえすれば容認可能となるが、それができない場合容認されにくい (例 : *知りぶり／*考えぶり／*ありぶり)。 (= (46b))

これら「N ぶり」「V ぶり」に関する意味的一般化を統合すると、「(Y の) X ぶり」の意味を次のように規定できる。

(49) 「(Y の) X ぶり」
X から喚起される〈個体 (モノ)〉〈事態 (コト)〉を介したその副次的な意味概念を、《対象》Y から直接観察可能な《特徴》として表す。

(49) の意味的一般化は、1 節で述べた、「接尾辞「-ぶり」の語形成における意味的な機能は何か」、特に、「多様な品詞が生起する「X ぶり」の意味をどのように捉えればよいか」という問いに対する本稿の回答となる。

本稿では、「X ぶり」の意味的側面について詳細に考察してきたが、「X ぶり」に関する研究としては、いくつか課題が残されている。まず「X ぶり」の成立条件について、さらなる考察が必要である。例えば、動詞連用形語幹が 1 音節となる語 (例 : 寝る、見る、来る) は、「-ぶり」が後続できないという条件がある (例 : *寝ぶり／*見ぶり／*来ぶり) (多田 2023 も参照)。また、(31) で見たように、「動名詞+スル」(いわゆるサ変動詞) は、スルの連用形

であっても「-ぶり」に接続できない（仕事ぶり／*仕事しぶり／*仕事のしぶり）。これは、外来語（例：サービスする）やオノマトペ（例：バタバタする）、複合語（例：早食いする）にも同様に観察される（例：サービスぶり／*サービスしぶり／*サービスのしぶり、バタバタぶり／*バタバタしぶり／*バタバタのしぶり、早食いぶり／*早食いしぶり／*早食いのしぶり）。「動名詞+スル」の連用形が「-ぶり」に直接接続できないということが何を意味するのか、接辞付加の体系という観点も交えて検討の余地がある。

また、構文的観点からは、「X ぶり」が、「N をする」や名詞述語「N だ」といった述語要素として生起する場合を考察する必要がある（用例は BCCWJ から）。

(50) 「X ぶりをする」

a. そんな小手先の戦いぶりをしておれば、播磨武士の名が泣きましょう。

b. [親友は] 大きな邸宅を構え、屋内プールまでもつくり、豪華な暮らしぶりをしていた。

(51) 「X ぶりだ」

a. 「いい飲みっぷりじゃないか。いける口だな」

b. 彼女は冷静な、穏当な話しぶりだったが …

これらの構文形式が、「X ぶり」に関してどのような制約を課すのかを明らかにすることで、「X ぶり」の意味をさらに厳密に規定できると考えられる。

最後に、動詞連用形を前接要素とする他の動詞派生名詞との意味的な比較が挙げられる。本稿では、「V 方」と「V ぶり」の意味の違いを明示的に記述したが、他に「様態（manner）」を表す派生名詞として、「V 様（よう）」（例：有り様）、「V 様（さま）」（例：生き様）、「V 具合」（例：焼き具合）などもあり、これらの意味的記述と相互比較を行っていくことで、広義の「サマ」を表す日本語接尾辞の体系的理解を深めていくことも必要である。

参考文献

藤巻一真 (2003)「名詞化接辞「方」に於ける問題」*Scientific Approaches to Language* 2, 1-24, 神田外国語大学.

藤巻一真 (2020)「「方をする」構文—意味と統語の記述を中心に—」『神田外語大学紀要』32, 19-39.

藤巻一真 (2021)「「動詞連用形＋をしている」構文について」『言語科学研究: 神田外語大学大学院紀要』27, 167-180.

伊藤たかね・杉岡洋子 (2002)『語の仕組みと語形成』, 研究社.

井上優 (1990)「接尾辞「～方」について」『日本語学』9, 101-111.

影山太郎 (1993)『文法と語形成』, ひつじ書房.

Kishimoto, Hideki (2006) “Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax,” *Lingua* 116,

771–810.
金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63.
小薬哲哉 (2023)「V 方ヲスル構文における解釈の二重性―構文文法的アプローチ―」『日本語文法』23-1, 189-205.
工藤真由美 (2012)「時間的限定性という観点が提起するもの」『属性叙述の世界』, 143-176, くろしお出版.
Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press.
Martin, Samuel (1975) *A Reference Grammar of Japanese*, Yale University Press.
水谷静夫・星野和子 (1994) 「名詞から副詞まで―語類の新しい位置づけ」『計量国語学』18(7), 331-340.
奥田靖雄 (1988)「述語の意味的なタイプ」(琉球大学集中講義プリント)『奥田靖雄著作集 02 言語学編(1)』(2015 刊行) 所収, 106-118, むぎ書房.
大島デイヴィッド義和・林みどり (2021) 「日本語の動詞的名詞（サ変動詞）の文法的位置づけ：専用型と兼務型」『国立国語研究所論集』20, 57-77.
Pustejovsky, James and Olga Batiukova (2019) *The Lexicon*, Cambridge University Press.
杉村泰 (2010)「コーパスを利用した接尾辞「-ぶり」、「-っぷり」の意味分析」『ことばの科学』121-139, 名古屋大学言語文化研究会.
Sugioka, Yoko (1992) “On the role of argument structure in nominalization,” *Language, Culture and Communication* 10, 53-80, Keio University.
杉岡洋子 (2005)「名詞化接辞の機能と意味」大石強ほか（編）『現代形態論の潮流』, 75-94, くろしお出版.
Sugioka, Yoko (2010) “Nominalization affixes and multi-modularity of word formation,” Etsuyo Yuasa, Tista Bagchi and Katharine Beals (eds.) *Pragmatics and Autolexical Grammar: In honor of Jerry Sadock*, 143-162, John Benjamins.
Sugioka, Yoko and Ito Takane (2016) “Derivational affixation in the lexicon and syntax,” Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, 347-386, Mouton De Gruyter.
多田朱里 (2023)「日本語の接尾辞「ぶり／っぷり」の使い分けについて」言語学フェス発表資料（2023 年 1 月 28 日, オンライン開催）.

執筆者紹介（掲載順）

王　鈺（WANG Yu）
人文学研究科言語文化学専攻　博士後期課程
蘇　暁笛（SU Xiaodi）
人文学研究科言語文化学専攻　博士後期課程
田尾　俊輔（TAO, Shunsuke）
国際共創大学院学位プログラム推進機構　助教
梶原久梨子（KAJIWARA Kuriko）
人文学研究科言語文化学専攻　博士後期課程
瀬戸　義隆（SETO Yoshitaka）
マルチリンガル教育センター　特任助教
三野　貴志（MINO Takashi）
長崎純心大学　講師
小薬　哲哉（KOGUSURI Tetsuya）
人文学研究科言語文化学専攻　言語認知科学講座

（2023 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2022

認知・機能言語学研究 Ⅷ

2023 年　5 月 31 日　発行

編集発行者
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻